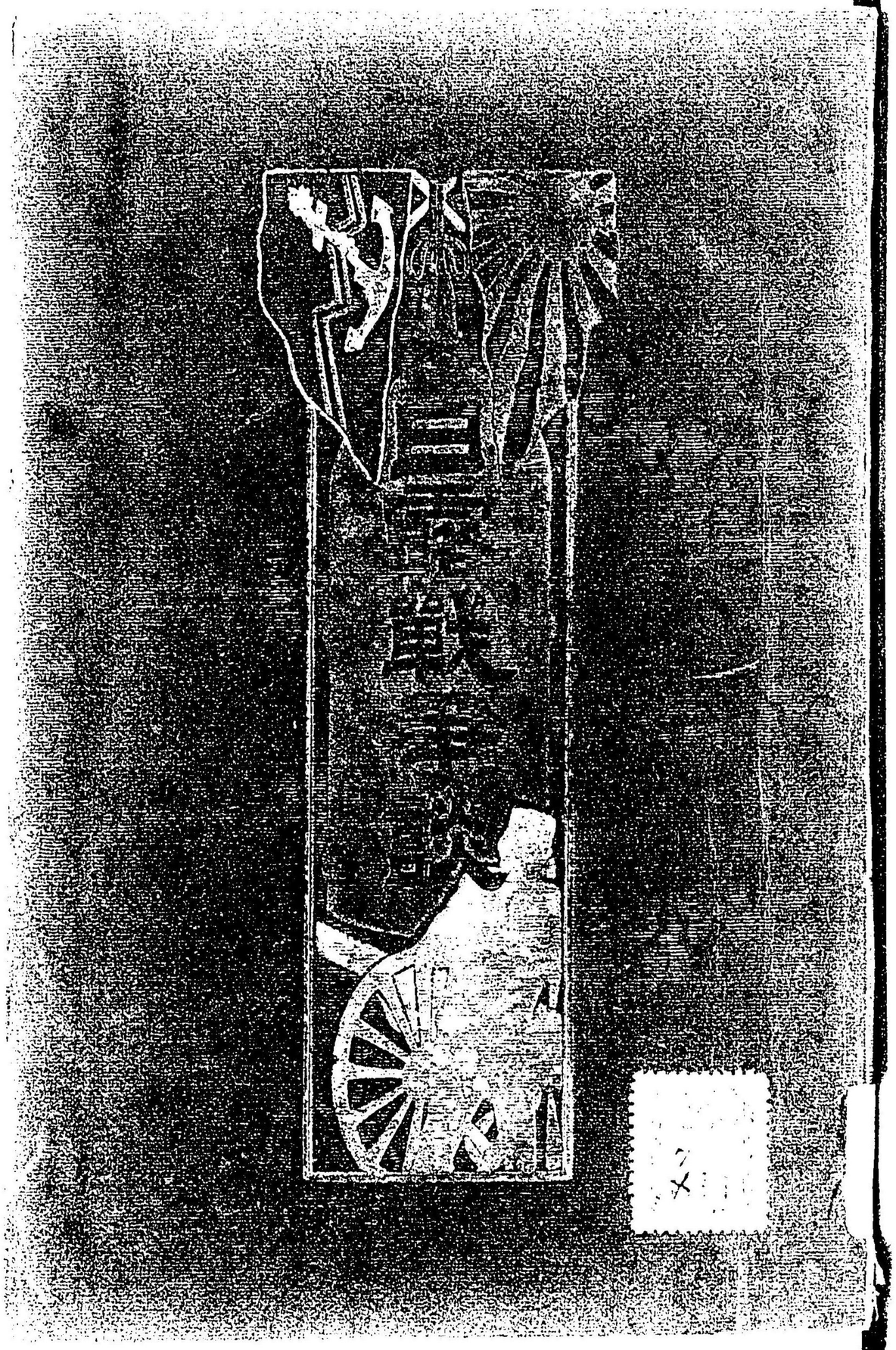

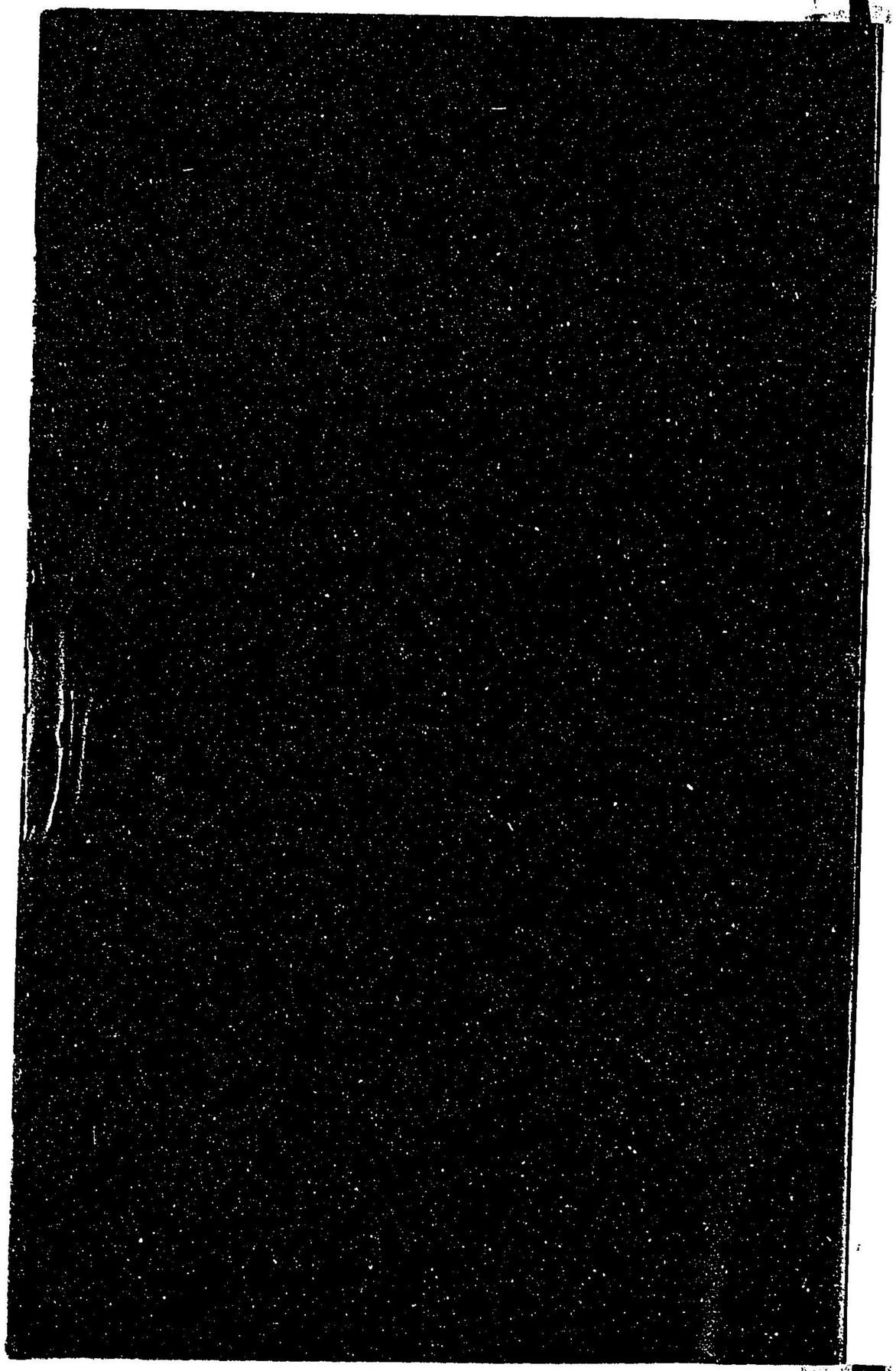

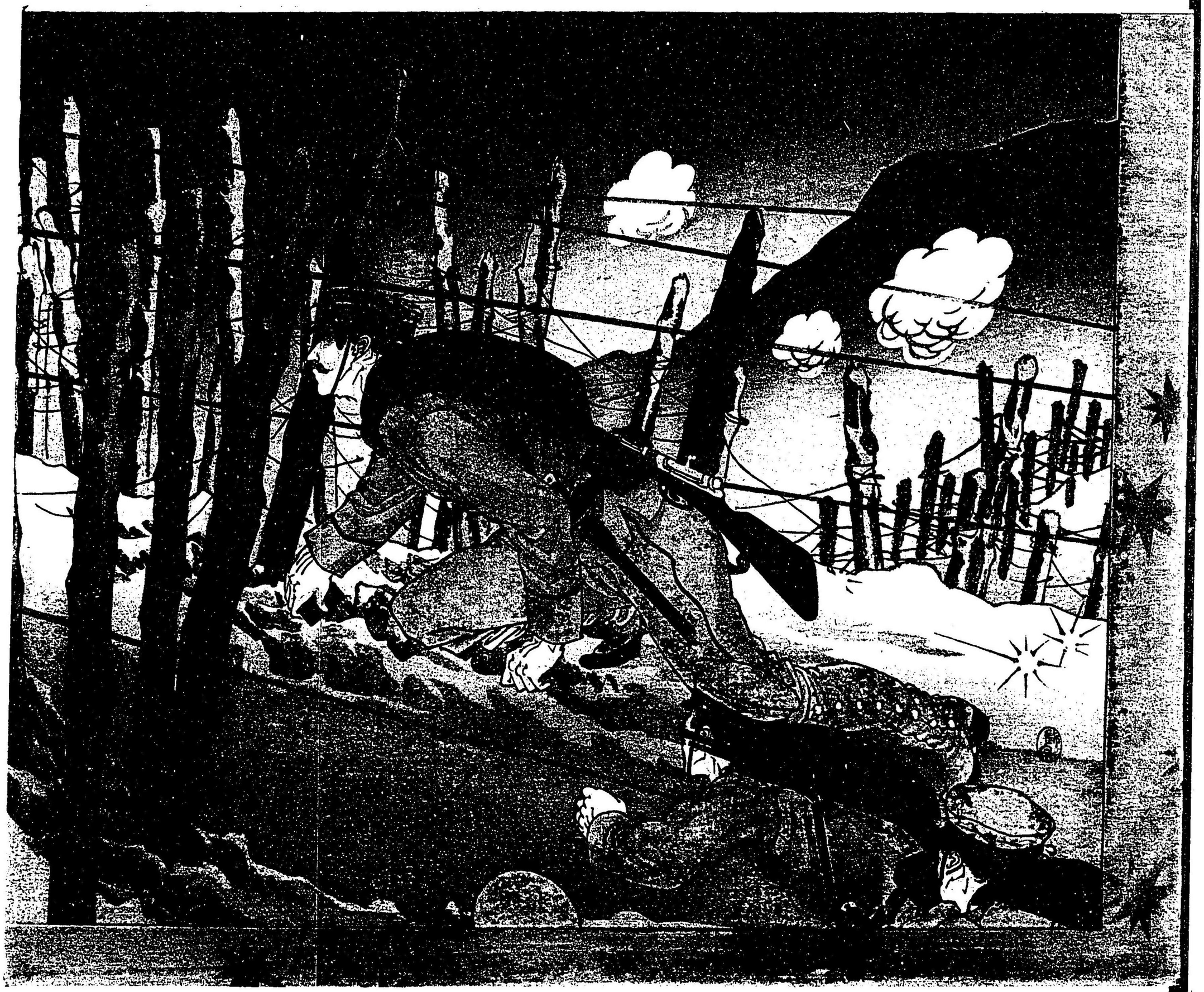

新講談
音曲入

日露戦争談（第八編）

美當一調講演
柿沼柳作速記

明治
43. 2. 24
内交

第壹回

之から三十五聯隊折下中佐の戰爭の狀況をお話しいたします、此折下聯隊は矢張り一戸少將の率いて居られる第七聯隊と一緒になつて、一旅團の組織になつて居るので御座います、第七聯隊の戰況は前回に申上げた通りでありますが、扨て歩兵三十五聯隊は大隊長を中西少佐、佐藤少佐、木庭少佐と云ふ順序になつて押出されましたが、其右翼には後備の山本隊が加はられる

事になりました、而して大打聯隊と時を合して第一回の突撃を開始されましたのは矢張り八月の廿一日の夜も明けなんとする頃ほいでありました。

此時は已に前回で中逃べました通りに盤龍山の東舊砲臺は已に非常な激戰最中で、大打大佐の方は全滅する程でありましたから折下聯隊の方も相變らずの苦戰に陷り、敵壘は已に間近に見えて居るけれ共、一歩も進む事が出來ない、夫は何うした譯かと云つて見ますると、敵は砲臺内から機關砲の砲門揃えて打出し、左右の砲臺からは大砲を打ち懸け、銃眼よりは小銃を以て拳下りに打出す、それ計りならまだしもなれど、砲臺眞下には最と嚴重な鐵條網が幾重ともなく張り廻してありますので、其鐵條網を破壞せんければ前進が出來兼ぬる、そこで折下中佐の以前の集合地でありました五家房から、工兵、歩兵の若干名を繰出して砲臺前の鐵條網を破壞しやうと云ふ事に決しました。

それに持つて來て、大打大佐の引率兵の死屍累々と横はり、前進路は進むに從つて困難を極め、折下聯隊の苦戰は今や極度に達するの狀況に陥りました、けれ共一戸少將からは『味方が何樣に苦戰しても、是非とも此砲臺だけは占領せねば相成らぬ、何程倒れても行く處まで行つて見よ、倒れて後に止計りだ』と云ふ仰せでありました、そこで折下中佐は木庭少佐を第一線に進ませられて、續いて中西少佐、之に次ぐのが佐藤少佐と、東……此時工兵の幾部も尾いて居たが……舊砲臺に向はれました、……扨て近寄れば近よる程死傷者の數は殖えるばかりで、何うしても其砲臺に登ることが出來ぬ、木庭少佐は氣を焦ち、自分で劍を打ち振り打ち振り『サア俺に續け、行つて行けない處は無い筈だ、俺が先頭第一いたして見せる』と圍敦ながら只眞先に進まれました、之を見た逸り男の銘々『それ大隊長に先を越されてなるものか、死花咲かして見せて呉れやう！』と、先を競

つて飛び出す。此有樣を敵は見るより、一入劇しく機關砲や小銃を以て釣瓶打にぞガタ〳〵バラ〳〵打出しました、其凄まじさ云はん方なく、少尉中尉は將棋倒しに倒れ伏し、下士兵卒は申す迄もなく、只三四百の殘りの味方が敵壘近く肉迫したれど只一兵も殘りなく打倒されて了いました、此時木庭少佐は、サア最う一歩だと云ひながら、敵壘目懸けてヒラリと計り飛び込んだ『そら大隊長が先頭だ』と、云はせもなさず、遑惶ながら木庭少佐は、急所を撃たれて名譽の戰死、されば、いざ大隊長を助けねばならぬと、二三の兵士が續いてバラ〳〵と敵壘内に飛び込んでは見たけれ共、何れも敵の目標になつて撃たれるばかりで進まれず、恁麼に激しい突撃も、其功遂に奏する能はず、遂う〳〵最初の目的を達する事が出來なくて、打退けられて了いました。

此有樣を高い處で見て居られた一戸少將は、此日中にどれ丈突撃を續けた處で、當底突撃の功を奏する事は出來ない、功を奏する事の出來ないのみならず、此まゝ無闇に突撃のみを續けたら、味方の兵は損ずる計りだ、何うせ之は夜に乘じて突撃せなければ、成功とても難かしからん『おゝ左樣ぢや〳〵』と打首肯れ、一戸少將は副官を呼ばれて『オイ〳〵副官々々、中央縱隊長大島中將隊長の許迄大急ぎで行つて來い』と副官を中央縱隊長大島中將（久直）の許へ走らせました。それと云ふのは此白晝の突撃は成功當底覺束ない、成功のみならず此上無理にも突撃を行へば、味方の兵力は只損ずるばかりである、今晩は幸闇夜であるから闇夜に乘じて突撃をいたしませう、と云ふ意味の書類を持たして遣られたので御座います、ところが縱隊長は之を見られるとすぐ折返しに『假令如何なつても機はないから、此突撃を繼續せよ』と云ふ命令を下されました、此猛烈な縱隊長の命令書を見て取つた一戸少將は、何うも縱隊長が恁う云ふ決心なれば仕

方はない、吾輩の希望を容れられぬなら如何んとも詮ない、一戸兵衛一死あるのみである、最う死ぬるより外に考へも及ばない』と意を決し、折下聯隊長に直に命令を下されました『斯くなる上は仕方が無い、折下中佐の率ひられる全部の兵を以て、第二の突擊を決行せよ』と云ふ事でありました、此時分大打大佐の殘部の兵は丸處等邊りに居りましたので、夫れを以て豫備として、折下中佐は愈々第二の突擊前進を始める事になりました。

此第二回の突擊運動が開始されたのは、最う廿一日の午後三時頃でありました、折下中佐は各中隊を集められまして、之から の隊形は餘り大部隊で無くつて小部隊がよろし、而も一列横隊だと云ふので、各々三百米突位づゝの間隔をとつて前進を始められました、午後の三時と云へば無論白晝の事、敵も味方もスッカリ見透かしになつて居るので、前進を始めると敵壘からは

例の通りに擊ち出しました、味方は倒れる死傷者を乘り越え、ワーッと計りに押し寄せたれど、以前の通りで何うしても敵壘を乘り取る事が出來ません、近くに寄りは寄つたけれど只一人として敵壘内に登り得ない、たゞバタ〳〵と倒れるばかりで、味方の損害尠なからず、されど此突擊には敵も餘程の損害を來したものと見えて、大分少なくなりました、されば味方は益々氣を焦つて、壘を守る敵兵は少數なるぞ、乘り取れ〳〵と如何に進んで見たけれど、敵は少數なれど掩蓋の内に隱れて居て、擊ち出すのであるから如何にも占領が出來ませぬ、只死傷者の數が增すばかりなので、此の樣子を見られました一戸將軍は、後に控えし服部隊の中から山本隊を以て折下隊の左翼に加へ此突擊の加勢をさせられました、即ち應援で御座います、去れど却つて味方の兵が增せば增す程死傷者は其數を增すと云ふ具合で、應援隊も何の甲斐なく依然として進まれぬ、そこで已む事

を得ず敵壘の下にある地隙の處に暫く敵彈を避けねばならぬと云ふ場合に立到りました、午後三時に突擊を始めて最早や大分時間も過ぎて日は早や西に搗きました、折下少佐は自分の部下を顧ると餘程減少して居るのみならず其上に、早朝からの突擊續けに兵も大分疲れが見える『之はしたり、何うしても此まゝ突擊を續行する事はとても六かしい』と見込みが付きますと早速一戸少將に向つて『到底晝間の突擊は成功の見込みが御座いませぬ、是非とも夜間の突擊が爲て見たい』と申されました一戸少將は勿論夜間の突擊が持論で御座いますから折下中佐の上申を一も二も無く承諾されて、暮れるを待つて夜間の突擊を致されよ』との命令を下されました、バラ〳〵になつて居る各小隊を集めて見ると、兵數已に多からずされども今更致方なしとて無いものから『今夜いよ〳〵夜陰に乘じて突擊するぞ』との命令を下されました、之迄の突擊に數多き戰友を失ひました下

士兵卒は『殘念だ〳〵』と晝間の不成功を夜間に乘じて盛り返さんと、日の暮れるのを今や遲しと待ち受けました、此間とても敵壘よりは絶え間なく打ち出して居る、地隙の中から一人で也外へ顯はれると一入激しく打出すので、此一隊は丁度地隙の中に打ち踈められて居る有樣、それで隊伍の整理も思ふ樣に運はない、漸つとの事にて夜の十一時前に何うか斯うか全部の集合と云ふが出來ました、此時一方の山本隊は最も激しき戰ひに死傷の數も夥だしくて、未だ十一時にも全部の集合が出來ませず、十二時過ぎて漸く集合が出來ました、されば廿二日の午前一時時分、まだ暗い間に突擊を始め樣と云ふのに決しましたが先づ一番に工兵を以て敵の鐵條網を破壞させなくちやならぬと云ふので、工兵隊に幾干かの步兵を附けて出されましたが、此時敵は斯くと悟つたものか例の如くに砲彈を絶え間なく打ち出して、我軍の運動を見ては機關

砲から亂射するので、なか〳〵もつて進まれない、されど一戸少將は夜間の突擊は不利益だ、是非共夜間の突擊がして見たいと大島中將に希望を述べられ、今や思ふ通りの夜間突擊と云ふに相成りましたので、今更遣り騷つた以上は、たとえ全滅するとも退く事は決してならぬ、是非目的を達するまでは行かねばならぬと云ふ決心でありましたから、倒るゝ兵の數を知らない程なれども何を屈せん倒れて後に偖已まんと亂射亂擊の砲彈を犯してだん〳〵前進を始められました、偖先に進んだ工兵と歩兵の僅かのものは探照燈の光を避けて敵壘近く進み寄りますと其處此處にある鐵條網を見事破壞して、イザ其處を越さんとする折から、後より進む本隊も已に間近く來ましたけれど、其時敵の方にも增援隊があつたと見えて、尙ほも非常の彈雨、此時も亦澤山の死傷者を出しましたが『何之しきに』と萬難を排して是非共進んで敵壘を我掌中に入れねばならぬ、萬歲々々』と

勇氣を鼓してほんの敵壘の下迄進み寄つたけれ共、此時、敵は益々頑强防禦に努めて、今は一歩も進まれない、流石に猛き一戸將軍も之を見て、是迄遣つて進まれないとは殘念だされど此の有樣では到底駄目だ、只徒らに味方に死者を出す計りだ、暫く其處の死角にあつて時機の到るを待つが良いと、夫から兵を進める事を止められました、そこで敵は多少打方を止めるかと思ひの外一向に止めない、砲火は益々猛烈に、大砲小銃間斷なく釣瓶打ちにと打ち出しますから、時機も何にもあつたものぢやない、一戸少將は之を見て、此有樣では何時まで待つた處で進むも退くも出來ないと云ふところから、縱隊長の大島中將へ又上申を致されたものと見えまして二十二日の午後四時頃、暫く突擊丈は止める樣にと命令が參りました、サア此間に死傷者の收容と云ふ事になつたけれ共、前にも申しました通り砲彈や探照燈に一寸とても動きは取れない、怱廢時には衛生

隊も何もあつたものぢやない、生殘者が寄つて集つて木蔭や石蔭に身を避けて近くに横はつて居る者のみを收容すると云ふ有樣で御座いました、併し夫でもポン〳〵敵の彈は遠慮なく遣つて來て、收容兵士が其處等あたりにバタリ〳〵と倒れ伏して、之も又一緒に收容されると云ふ騷ぎ、困難に困難を重ねて漸つての事に將校は將校、下士は下士と僅か計りの收容が出來ました、そこで其山の下迄退かうと云ふに決しましたが例の探照燈や砲彈にて一歩と雖も退かれない、彼處の隅や此處の地隙に身を隱くし、只敵の方から出て來るのを防ぐ計りの覺悟をして退くべき時機が來たなら退いて遣らうと折を窺つて居られたばかりで御座います。

味方は斯の隊形に進まれは進まれたが斯くの如くに第一回の突擊は何の功を奏する事も出來ずして、云はゞ味方は散々バラバラになつて了つたと云ふ有樣でありました。

偖て一方折下聯隊の方では、大隊長の木庭少佐が名譽の戰死をされた計りで、中西佐藤の兩少佐はまだ幸に無事で御座いました もとより聯隊長も無事であるから、一戸少將も氣强く思はれ此折下聯隊を本隊として大打大佐の殘りの兵を豫備として居られました、此大打大佐の七聯隊は前回已に申し上げました通りに大打聯隊長の戰死を始めとして、佐久間少佐、廣中少佐、吉田少佐、皆何れも斯の激戰に名譽の戰死、聯隊長大隊長皆戰死すると云ふ位でありますから、中隊長、少隊長、下士兵卒は申すに及ばず、殘兵とても其んの僅か計りで大尉では粥川重尾、中尉で田中富次郎、少尉では島野多志、特務曹長で鈴木直松、それから工兵大尉で杉山義廣、それに濱島と云ふ特務曹長、姫野津田の兩軍曹、牧下士官以下六十名位でまア總勢八十名近くで戚地隙の處に敵彈を避けて一團となつて居られました、其地隙と云ふのが雨あがりのことゝて泥水が溜つて脛を沒する程であ

りました、そこで味方の負傷者を其處へ運んで來る譯に行かない、全く死んだのだつたら何も構ふ事は無いけれど、息の通つて居る負傷者を無暗に泥水の中へ放り込むと云ふ慘酷な事も致されませぬ、寄つて懸つて地隙を少し削り廣めて其中へ自分達は這入つて居られました、恁う云ふ具合でまア〳〵敵の彈は漸く避けられますけれ共、情無い事には肝心の糧食が無い、糧食計りか水も無い。二十二日の最早や午前八時と云ふのになりましたが何分廿日、夕食を喰つた計りだ、廿一日は戰鬪續き丸で一食も喫し無い、尤も携帶餱糧は持つて居られたが最う遠うに喰ひ盡くして了つて居たので空腹だと知つて見れば益々饑じい流石勇敢なる我將卒も萬一敵が打つて出たなら何う爲やうかと云ふ有樣でありました、恁うなれば只敵彈を地隙に依つて避けて居られるまでの事で退却とても出來ない、さらばと云つて此位の少數の兵で敵壘に斬り込むと云ふ無謀な事も出來ないしと

云つて此まゝ恁うして居れば餓死にするより外はない、苟くも軍人ともあらうものが餓渴に死んだと言はれては實に此上もない不名譽だ、何とか可い工夫は無いものかと皆が寄つて協議をして居られると、一方若い方の連中は『何ッ一日や二日を飲まず食はずに居たとて、何が敵壘に飛び込んで死ぬる位の事が出來ない事があるものか、餓れ死をやるより寧その事敵の陣地に枕を並べて死んだが益だ』とワイ〳〵云つて居る、其處で梶川大尉や杉山大尉等は夫を制して『ヤーそう〳〵無謀な事を云つたとて仕方は無い、恁うやつて此儘死ぬのは隨分馬鹿氣てる、此まゝ死ぬのは犬死だ、何れ機を見て敵壘に衝き入り少しは氣の利いた死樣を爲やうぢや無いか』と流石は中隊長だけにあつて却々餘融が御座います、すると其中の一人が『夫では一つ腹を肥して一番敵壘に迫つて見ては何うで御座いますかは其の腹を肥やすと云ふのが問題だ』『ウム夫は何より結構だが、

『なに夫なら譯は御座いません、之から捜し出て見ますると敵や味方の死体が大分轉がつて居りませう、其ポケットには大分の喰ひ餘しが這入つて居るのに違ひ無いから、夫を盗んで來たら是位の少數の兵の腹を肥やすなんか、何も面倒な事もありますまい』『なる程、それは面白い處に氣が附いた、夫では一つ命懸けで二三の者が夫を遣れ』『エ、夫では』と二三の兵士が飛び出した、人影が動くと敵壘からは直にポン〳〵打出すので堪らない鮮血淋漓の死骸の傍らに平伏て彈を避け、敵が打る方を止めると コッソリ手を出して軍服のポケットを探つて見て其處から一つ彼方から二つと拾ひ集めて見ると大分ある、黑パンに氷砂糖は敵の死骸から採つたもので干パンやビスケットが味方の物之では僅かの兵敵の腹を肥すに充分だと元の地隙に持つて歸つて『サア大隊長殿少隊長殿お上りなさい』と差し出すと『何う』も命懸けに取つて來たのを俺から喰ふのは勿体ない、まアお前

から先に喰へ！』『イエ最う私共は勝手に喰つて參りました』『ハ、、、左樣ぢやつたか、夫では一つ御馳走になると爲やうか』と口に入れたが皆食物は血染めの食物、平常なら怎麼物は見るのも嫌だけれ共も「餓れて忌まぬ人心」と旨い〳〵と喰つて居られる『オイ平常怎麼物を喰つたら、早速虎烈刺か赤痢病を患つて直に避病院と云ふ處だが、人間と云ふものは妙なものだ、腹が透いて餓じい時には何でもかんでもお出でなさいで喰つて居る、之から思ふと今の人間が衛生々々と云つてるけれど、十分働いて十分喰つた方が躰に一番可い樣だ』『オヤ〳〵戰爭中に大隊長の衛生談で御座いますかワハ、、、』と笑ひ乍らに喰つて居られたが、夫で段々腹は膨れて來た、腹が膨れて來ると今度は水が欲しくなつて來た、人間と云ふものは勝手なものだ、『オイ〳〵水が飲みたくなつた』『慾な事を云つちや可けんぞ、最う少しで餓れ死にと云ふ處に喰物があつたのに夫を喰ふと今

度は水、夫は餘り慾過ぎるは！』『併し何うも喉が堪らなくなつて來た』『夫ぢや此泥水を飲み玉へ』『馬鹿ッ此泥水が飲めるものか、泥水計りならまだしもだが、之れ怎麼に死傷者の血が流れて居るのに飲めるものかい』『飲め相ぢや』『何うして飲めるものか』『ハンカチを泥水の上に張つて上からジュー〳〵吸ふのだ、絹漉しで結構だよ』『ウム左樣したら可いや、旨い處に氣が附いたものだ』手に手にハンカチを出して泥水の上に擴げて張つて口を付けてちう〳〵吸ふと云ふ有樣で苦しい中にも大笑ひ『ヤー萬歲々々、飲んだり食ふたり歌ふたり』諧ふたりは出來ないが兎に角腹はスッカリ出來た『サア之からは最一度懸つて敵壘を拔かなきやならぬぞ、今度と云ふ今度は死んでも占領せんけりやならぬ』『中隊長殿！腹も出來たし元氣も附いたし最う敵壘を乘り取る事は何の苦も御座いません、愉快々々』『左樣云はれると實に愉快ぢや、サア夫れなら之れから一と奮闘死花を咲かせにやならぬ』と、軍議忽ち一決し、イザ之れからぢやとなりました。

第二回

漸く饑渇が癒がれましたので之から敵壘斬入りだと決心が付きましたが、此時歩兵と工兵の混合隊でありましたから、將校下士卒皆打寄つて話が始まりました、話と云ふのは皆悉く敵砲臺に飛び込んで思ふ存分斬つて斬つて斬りまくると云ふお話で云はゞ軍議で御座います。此時歩兵の將校の連中には『兎に角敵壘に突き入るには敵の機關砲を打壞して置かないと何うしても不利益だ、敵の機關砲を毀さなければ六十や七十の少數では假令へ飛び込んだとて、敵の砲臺下にも取つ付かれぬと云ふ事は明らかである、其處で機關砲と掩蓋部を滅茶々々に打毀すが一等策だ、夫となると工兵隊の力を借らねば仕方が無い、杉山

中隊長殿何うでしやう』斯く中小隊の人が申されますと、杉山大尉は夫迄默り込んで居られましたが首肯作ら『ヨシ〳〵夫は成程我々工兵隊の力を俟たなけりやなるまい、幸にしてまだ幾らかの兵も居るので大丈夫だ、夫なら僕が引受け樣』此一言に歩兵も工兵も期せずして愉快々々と一同に鯨波を作つて叫ばれました其聲を聞いた敵墨からは『そら喊だ』と云つてるのか知らね共、無暗矢鱈にパチ〳〵〳〵打ち出したから『それ又打ち出した、打出す筈だよ、餘りワイ〳〵大聲擧げて叫ぶからだよ、靜かに靜かに！』と暫く鳴を靜めて居ると向ふでも果して打方を止めて了つた、杉山大尉は『オイ〳〵姫野軍曹、敵砲臺にある機關砲に爆藥投彈の重任を與へるぞ』此一言に姫野軍曹は非常の喜びで、此の場合斯かる大任を不肖私にお授け下さるとは實に私の光榮之に過ぎた事はありませぬ、上官の御命令確かに承知いたしました、夫では』と斯く云ひつゝ、一旦地

隊を這出でまして、機關砲の据付けてある處や掩蓋の有樣を詳しく視察いたしましていよ〳〵出發と云ふ事になりました。此時姫野軍曹は二名の兵を連れて行く事になつて一等卒の高島長造と二等卒の高木吉松を連れて出られました、此一軍曹と一二等の兵卒併せて三名が直にズン〳〵前進をされると、杉山大尉はズツと後ろに居て此樣子を双眼鏡で見て居られる、姫野軍曹が一人先へ進んで行けば高島一等卒と高木二等卒とが姫野軍曹と杉山大尉と大分離れて居られるから、丁度其中間に立つて種々の合圖をすると云ふ任務に當つて居られます、斯くと知つた敵砲臺からはドン〳〵パリ〳〵打ち出しました、此時敵の兵數は餘り多い樣にも思はれませぬが、拳下りに三人を目標に射つから堪りませぬ、少數の敵だとは云ふものゝ丸は殘らず三人の味方を目的に飛んで來る事宛然蜂の如くなり、されと決死の姫野軍曹は少しも怯まず潔進に敵壘差して飛び出しましたが、

餘りに激しく敵彈が來ますので、こりや到底此まゝで敵壘へ突き込む事は出來ないものと思つたのか、姫野軍曹はいきなりバッタリ倒れました、此敵壘前にバッタリ倒れたるは決して敵彈に射られたのぢや無い、即ち死んだ眞似をして居られるのであります、其以前からズッと見て居られた杉山大尉が誠に危險危險と云つて居られた口の下に姫野軍曹が倒れたのだから『アッ之はしまつた、折角の策略を敵壘前で倒れさしたのは殘念だ』と双眼鏡を取り直して見られる、負傷したのか、無事なるか、夫等は確かに分らぬけれど、姫野軍曹は寢乍らズン〳〵進んで居られます之が即ち佝匐で御座います、そして間も無く鐵條網を越えて了つた、杉山大尉は此有樣を打眺め、愉快々々死んだと思つた姫野軍曹は、矢ッ張りズン〳〵進んで居る哩、夫にしても佝つて行く所を見ると脚部を敵に射られたのか、いや〳〵敵彈を避ける爲めの佝匐進行だ』と一人で云つて一人で答へて心

配して居られる、歩兵將校連の方にても全斷だ、双眼鏡を眼から離さず、オヤ倒れたぜ』『撃られたのかい』『イヤ這つて進むのを見ると脚部の負傷らしい』『イヤあり、や敵を欺いとるのだ、死んだ眞似をして矢張進んでるのだ、そら最う敵砲臺の眞下に着いたぞ、愉快々々何でもこりや旨く遣つ付ける哩、敵はまた一向に知らない模樣だぜ、確かり遣つて呉れ一頼むよう』と口々に愉快々々と云つて居られたが、一方姫野軍曹は前砲臺の眞下に近寄つて一息吐き流された、最う姫野軍曹の來て居られる所は敵砲臺の眞ん中の眞下であるから敵彈も最う旨く飛んで來ませぬ、そこで姫野軍曹は一息吐くと同時に携へ居たる爆藥を早速取出して直に火を點けました、火を點けると直に機關砲の備へてある穴の中へ投げ込みました、處が今投げ込んだと思ふ刹那に轟然たる音響と共に爆藥彈が破裂したのだから堪らない、ドーンと云ふ音と共に其處等一面眞つ黑になつて了つた、此の

異つ、黒になつたと云ふのは煙ぢや、御座いませぬ土や何かを撥ね飛ばしたので一寸先きも見えぬと云ふ有様、それでも砲臺の内部は大部打ち壊された事が判りました、併し何の位の損害であか、其處の處は詳しく分りませず、けれ共杉山大尉の見られる處では何でも機關砲の据え付けてある穴の右手の方の上の一角は確かに大破損を來して居るに相違ない、姫野軍曹にも之丈の事は確かに判つたから大急ぎで杉山大尉の方へ歸つて來ました其時は敵も餘程周章てゝ居たものと見えまして、始め姫野が前進する時の樣には打ち出さなかつたので何の異狀も御座いませぬ。

斯くて杉山大尉の居られる所へ駆付けると、敵壘下に個い寄つて旨く爆薬弾を投げた一伍一什を服命いたされました、杉山大尉は之を聞くと非常の喜びで『姫野！只今の功績は確かに本官が認めたぞ、實に天晴れの手柄ぢやつた』と賞められて姫野軍曹は面目を施し暫く其處に控へて居られますと杉山大尉は

再び姫野軍曹を呼ばれまして、今度は機關砲の窖室破壊を命せられました、それと云ふのは姫野軍曹の力量を認められた上再び此大任を任せたので御座います、サア恁うなれば姫野の得意は非常なものにて、杉山大尉の吩咐によつて一等卒の中島仁三郎、細野源太郎、二等卒の中島千松、此三名を率ひて行く樣に相成りました、夫で行かうと再び地隙を出でゝ敵砲臺に向つて前進を始めましたが、初めの爆發に大分の死傷者を出したものと見えまして段々前進するけれ共一向に打ち出さない、そこで四人は一擧に目的地に達し、此勢でイザ躍進と尙ほも前進を續け樣とするとサー堪らない、近寄ると見るや敵壘からはバラ〳〵〳〵猛烈なる射擊を始めました、流石に猛き姫野軍曹も之には隨分僻易し、之では一歩も進まれぬと見て取ると姫野軍曹始め地隙の處にバラ〳〵〳〵擊たれた眞似をして轉がつて了つた丁度其處は敵の鐵條網のほんの附近でありました、手前め

方の杉山大尉は依然として此樣子を双眼鏡の手も離たず見て居られましたが、四人の者が倒れたまんま何時迄待つても一向に出ませぬので氣が氣でなく、第一回には見事其功を奏したが今度と云ふ今度は撃たれたか、四人が四人無慘の最期を遂げたのか、敵前に死ぬると云ふは覺悟の前だが遂り遂げずに死んだのが殘念だ、アー是非遂げたいと一人で藻掻いて居られるけれど一向に出てそうにない、其處で今度は上等兵の端久太郎一等卒の折本政吉二名を呼ばれまして『サー之から貴樣達二人を撰抜するから是が非でも今度の任務を完うせよ』と遣はされました、之で都合六人になつては居りますけれど、前の四人は已に戰死さしたものと見て居られるから、六人と云ふは只名ばかりで、進んで行くのは二人の外に居りませぬ、二人の者が雨か霰の敵彈を潜つて進んで見ると姫野軍曹は固より無事、外の三人も微傷こそ負ふては居るが、矢張り地隙の處に伏さつて時機の

到るを待つて居たので御座います、そこで間近く遣つて來て、『オー軍曹殿は御無事で』『オー君達は何うして來たのかい』『イヤ大尉殿が最う姫野軍曹の四人は到底活きて居ないから、早く行つて姫野軍曹の任務を繼げよと命ぜられましたから遣つて參りました』『オー左樣か、よし〳〵何うも四人では少々人數が足りないと心細く思つて居た處だ、貴樣達が來て呉れたのは何よりだ、サア六名となつたら二つに分れて三名宛に行動を始めるぞ、サア最う大丈夫、之から鐵條網を越えて目的の地に突き込むんだぞ』と地隙を出でゝ鐵條網を越えに懸つたが此時敵の方からは又しても バラ〳〵〳〵 打ち出しましたけれ共、地傾所で割合に敵の彈が中らない、そこで遂う〳〵敵砲臺の外傾面の下迄達しました、之で可しと云ふので、各々携え居たる爆發筒に火を點けて指定の處を差して投げ始めた、投げると同時にピラリと其處を飛び離れて地隙の處へ這入つて丸を避け結果が

何うであつたかと窺つて居たが、姫野軍曹が機關砲の窖室に投げ込まれたのと胸墻部に投げ込まれた此二つ丈は美事に其功を奏して機關砲は撥ね飛ばされ窖室は天に冲すると云ふ有樣、之を見て居た人々は愉快々々と思はず拍手した、之と同時に遙か後方の歩兵工兵の一隊からもパンザーイと一齊に叫ばれました然るに掩蓋破壞の方に向つて投げ込んだのが何うも爆發しない之は投彈と云ふけれ共、其實左樣でなくして、爆藥を物に入れて投げる投彈と云ふのでは何うしても破壞が出來ぬと云ふ見込みでありましたから、此方面に行つたのは竹桿でありました、此竹桿と云ふのは一寸御婦人や子供のお方にはお分り惡いと思ひますから御參考迄にお話しを致して置きます、此竹桿には一丈位の物もあれば又ズッと短いのも御座います、竹も矢張り大きいのと小さいのがあります、夫以上だと思つて居られたら間違ひは御座

いませぬ、夫を二つに割つて中の節を立派に除つて丁つて夫を合せて其中に爆藥をシッカリ詰めて其上を繩を以てグル〳〵酌しも隙間の無い樣に卷き立て丶後先を密閉し導火繩を付けてあるもので、夫に火を點けて投げ込むんぢや無い押し込むので御座います之が即ち竹桿のあらかたのお話で御座います、扨て其竹桿を持つて行つて敵砲臺の穴の所へ深く挿し込んでイザと計に火を點けたので御座います、今の投げ込むのとは餘程違つて居りますので夫丈又困難の樣でありました、之が二三分間經つても一向に爆發しない、其處で姫野軍曹は夜叉の如くに猛り狂つて飛び廻り、何うしたのだ、何うして竹桿は爆發しないのだらう、爆發しないのは何うも不思議だ、或は敵壘から打ち出す彈が猛烈だから自然に導火策を打ち切つたんぢやないのか知ら『或は左樣かも知れませぬ』『夫では恁うして居ては』と行かうとすると、勇卒中島千松は『軍曹殿私が參ります』とヲリと計り

飛出し身を躍らして敵砲臺の外斜面から攀ぢ登りますので、中島危ない危險だぞ』と皆口々に呼ばれるけれ共、後をも見ずして進みしが、果して竹桿の導火策に始めて點けた火は消えて其まゝ其處へあつたから、携えて居た燐寸を取出し其導火策に再び火を點け元の地隙に悠然として立歸りました、今歸り着いたかと思ふと投彈とは違ひ一丈に餘る竹桿が爆發したので其響と云ふものは怖しいもので、天地も崩れる斗りの轟然たる響でありました、而も之が爲め其方面は見事に大破壞となつたので再び工兵萬歳が一同の口から期せずして發せられました、將校下士卒皆此樣子を後の方から見て居たが、工兵の力で斯く迄目的を達した以上は、之から先は歩兵の番だぞ、前進々々と早や下士卒の方が叫び出して、已に各々乘り出そうと云ふ勢で御座いますから、此機を逸してはどもならぬと云ふ處でいよ〳〵前進と決しました、

此一隊櫂川中隊長を始めとして、田中島野の小

隊長、杉山大尉の率いて居られる工兵を皆んな合せて六七十の少兵數、けれども早や前進を始めし頃には敵砲臺でも先刻破壞されし爲めか何だか退却の色が見えました、櫂川大尉は之を見て、サア敵は退却するぞ、此機を逸せずサア吶カーン』と乘り進む、杉山大尉も諸共に先を競い進みしが、敵は退却し始め乍ら又ボン〳〵と打ち出す、櫂川中隊長は間も無く些かの負傷を爲されて田中中尉が代理を勤めて益々前進、歩兵も工兵も一同に盤龍山の東麓砲臺天窓の一角に登り着くと云ふ鹽梅で僅かの兵數を以て美事其功を奏し直に日章旗が其處此處に飜へれば、苦戰の後の愉快の爲めに拍手萬歳間には感究まつて泣く者も御座いました。

然るに話變つて中央縱隊大島中將の方では、左翼の難局に當つて居られる一戸少將は五家房と云ふ高地に在つて此前日から幾度となく敵壘差して突進をいたされましたけれ共、たゞ死傷者

を出す計りで一度も其目的を達する事が出來ませぬから、まア一先づ突擊を中止する事となりましたが、此櫂川大尉杉山大尉が盤龍山の一角を占領した時は、一戸少將の居られる處と櫂川隊とは全く連絡も絶へて居たものだから、今僅かの歩工兵で盤龍山の一角を占領した事は少しも知つては居られません、されども絶へず斥候は出して居られるし敵の働作を高い所から見て居られたが、不圖盤龍山の方を見られると日章旗らしいのが翻々として居る

『ハテ變だな』

と双眼鏡を取り出しよく〳〵見ると確かに日章旗で且つ點々人影さへも認むる事が出來たから、之は愈々日本軍には相違なし

『サア敵壘に日章旗が飜へつたぞ、怎うなつて來ては一時だつて猶豫はならぬ、前進だ〳〵』

と直ち突擊開始の命を下しになつた。此時折下聯隊の方と後備の山本改之亟の率いて居られる一隊を、大急ぎで前進する樣にと繰出された、

丁度此時分敵兵は大方退却して居ましたけれど我軍の

占領して居られる盤龍山の西東の塹壕内には未だ多少の兵が居ると見えて、斯くと見ると其外斜面から此處を先途と打ち出した、夫が小銃計りなら何ともないが大砲迄も打ち出した、而も今迄占領された一角に向つて打ち出して居たが敵方にも一旦退却した兵員が段々後ろの方から加はつて尙ほ猛烈に打ち出した、夫で此方の大部隊飛で來る戸少將の一隊には凄じい程砲彈が飛んで來るわ〳〵、殊に後方なる大部隊の一彈に三四名も斃されると云ふ悲慘の狀況、一僅かの時間に餘程多數の死傷者が出來ました、其有樣を敵は見て

『此勢に乘じて今領られたる盤龍山を取り返せ』

と云つたのか云はないのか、一旦退却した敵兵が俄かに逆襲の態度を取つて出て來る模樣で御座います、其處で一戸將軍の許え都合があつて殘されてあつた大打大佐の部下の高橋少尉の率いて居られる即ち豫備の一隊を先づ繰り出し續いて工兵の一隊も送つて占領したる砲臺に防禦

工事を施せと云ふ命令で御座いました夫から又引續いて砲兵も繰り出された、此砲兵と云ふのが山砲なれば兎も角野砲となつて參ると馬に輓かせにやならぬ、尤も多數の人が擔ぐなら擔がれぬ事もないが、野砲を擔ぐとなると何うしても三四人は懸からねばならぬ、それには大きな棒も要る、繩も用る、道でも廣けりや兎も角なれど道と云ふ完全な道はないから矢張り其の山の中を馬に輓かせて人が押して行くと云ふ騒で非常な混雜である で地隙に轉がつて居る敵味方の數多の負傷者は、此大砲の車輪の爲めに轢き殺されると云ふ有樣で、實に名狀すべからざる混雜で御座います、其困難を犯して次第々々に進んで居られると敵は益々之に乘じて大砲小銃を擊ち懸ける、其處で味方はだん〳〵兵が減じて來るので却々以て心細い、夫では云ふので後備旅團の竹之内少將の部下であつた三上大部隊を送ると云ふ事になりましたが敵は之を見て二龍山から鷄冠山の二砲臺から

も擊ち始めたので非常の損害を出し益々苦戰の樣に陷つた、夫で始め盤龍山を占領した小數の我歩工の人は、最う携帶の彈丸は擊ち盡くし、尠しも無い、ところえ敵は刻一刻に進んで來て最うい〳〵始め占領した一角も殘念ながら再び敵の手に取戻されると云ふ樣な場合となつたから石を拾ふて投げ始めた、向ふからは鐵砲の丸で遣つて來るのに味方の方は石を以て之に向はねばならぬ、隨分と割の惡い話で却々以て支えきれない、斯かる處に敵は愈々肉迫して已に其先頭は登て來る、味方の兵は登つて來る敵を待ち受けて銃劍を振つてズブリッと突き立てます、其働きは非常なものでありました、折柄折下聯隊長、中西大隊長が來られたから、最うこそ譯はないのだ、確かり遣れ！と氣が立つて、茲火花を散して一生懸命の奮闘で御座います群がる敵を斬り立て擊散らす、一同にワーワーッと遣て來て是非始めの敵壘を乘取らんければならんと迫つて來ては殺と打出

す敵彈に味方の兵はバラ〳〵倒れ『之は』と思ふ間もない折下聯隊長が其處へバッタリ倒れられた『アッ聯隊長のお怪我だ！

『イヤ負傷ではない戰死だぞ』『ナニ聯隊長殿の戰死？之は困つたなあ』と口〳〵に云つて居ると中西少佐が、聯隊長が斃れても中西が居るから大丈夫だ、何も心配するには及ばない、サア擊つて、打てッ』と西に東に馳せ廻つて指揮して居られると、ヒュー〳〵と飛んで來た敵の一彈は無慘や中西大隊長の急所を深く貫いた、哀れ中西大隊長は一語も發せず山上の露と計りに消え去せました。

聯隊長に次いで大隊長が戰死されると云ふ程だから、味方の苦戰は此上もない、サア怎うなると仕方がない、左翼に居られた一戸少將自から一部隊の豫備を引つれて東砲臺に馳せ登り、其の高地に樹つて雲衝く計りの大兵の一戸少將が指揮を採られる、此時敵砲臺かちは一入激しく擊ち出したから味方の死傷者累々く

として山上に横はる、一戸少將は兼ねて沈着の人なれ共其時計りは大聲立て、工兵は居ないか、工兵だ〳〵、工兵隊の防禦工事が頼みたい』と叫ばれたから、此命令を聞いた工兵隊の葦火中佐、杉本大尉は『サア命令だ』と必死となつて防禦工事に努めて居られたが、容赦なき敵彈は無慘や葦火中佐も杉本大尉も其場にバタリ擊ち伏せました、然るに此工兵隊の援護をして居られた宮脇大尉の一隊も餘程の奮鬪を續けましたが、宮脇大尉が間もなく戰死、味方は益々苦戰の狀態でありましたが、天なる哉、天なる哉、先刻お話いたしました砲兵の一隊は死骸を乘り越え遣つて來た、左樣して逆襲の敵兵に向つて猛烈なる射擊を始めたが、此時分或る方面にも亦達して居た砲兵の一隊からもドン〳〵打出したから『サア味方からも大砲を打出した今だ今だ』と後方に居た步兵の部隊からも一生懸命敵の方に向つて打ち出しました、去れば砲兵步兵の必死の働きで逆襲して來

たさしもの大敵も、遂に味方に敵し兼ねましたか、砲臺脱回の念を絶ち、次第々々に西の方へ敵は殘らず退却をしてしまひました。

第三回

盤龍山を占領したのは丁度午後の五時頃で、該砲臺は其全部の占領が出來たので今は全く我軍の物となつて了つた、併し其附近には舊砲臺と云ふ有名な砲臺が御座います、其處にも相變らず頑强な敵が居て我軍に向つて抵抗をして居るので御座います、此の舊砲臺と云ふのが一つの名を西舊砲臺と云つて、我軍の占領した東の方のを東舊砲臺と申して居ます、然るに東舊砲臺占領迄は此西舊砲臺に對してはまだ〳〵我軍より全力を注いで占領しやうとしたのでは御座いませんが只僅か計りの銃砲火を送つ

た丈であるが、いよ〳〵東舊砲臺を占領した以上は是非とも此西舊砲臺も占領せんければならぬ、併し此東舊砲臺を占領したからと云つて一寸も油斷が出來ない、夫で相當の準備を施して午後三時頃になつて西舊砲臺攻擊が行はれる事になりました、最う此の時分は隊伍も滅茶々々となつて居て一向に纏まらない其時折よくも濱口と云ふ中尉が二個小隊を率いて居られました から中央縱隊長即ち大島中將が此の濱口中尉をお呼びになりまして、此西舊砲臺の視察を命じ、事情の許す限りは突擊を試みよとの事でありました、濱口中尉は、僅か二小隊の兵百計りを以て此敵壘視察に參り都合がよければ突き込めとあれば愈々戰死に決まつて居ると、戰死の覺悟を致されまして、中央縱隊長の命令通りに直に出發と云ふ事になりました、此の中央縱隊長は部下に對する情誼も厚いお方でありまして、敵の樣子を確と視察をして來い、併し其視察の結果突き込んで敵壘が取れる樣

たつたら敵壘を占領せよ、決して無暴な戰爭はしてはならぬ、と云ふ樣な意味を以て命せられました、併し濱口中尉は假令何うあつても是非飛び込んで敵壘を占領せんければならぬ、夫が出來ねば不肖濱口の率いる二個小隊は全滅するばかりだと、非常な決心で部下にも其意を傳へ、サア出發と云ふ事になりました、此時分縱隊長は自ら出て來られまして、訓諭を口授されました、其訓諭の大要は斯うであります。

汝等の今將に出發せんとする際に一口望む、汝等の今回の任務は最も、重く且つ大なるものにして、我軍の榮辱は即ち大日本帝國の榮辱なり、汝等百難を排して其任に衝り、一死以て國に酬ゆるの心掛なかるべからず、敵の抵抗又大いならん、汝等進むに際し上級將校斃れなば、次級將校之に代り、次級將校斃れなば下士之に代り、下士斃れなば兵卒之に代り、只々進め一歩だ

も退くを許さず、最後の一人となるに至る迄、踏止まつて奮鬪せよ。

先づ斯樣な意味で御座いましたから、濱口中尉は申すに及ばず下士兵卒も奮激して『縱隊長の今の訓諭をサア立派に守つて死んで見せるぞ』と隊伍肅々として其處を繰り出しました。素より此時とても相變らず敵壘からは大分劇しく擊つて居りますから、普通演習行軍の時の樣に側面從隊の隊形では進まれませぬ、僅か二小隊の兵を或は一分隊、或は半小隊と云ふ樣に隊を分けて、戰鬪隊形を以て次第々々に乘出す、死出の旅路と心得て、辿る山路の凹凸を、彼處に進み、此方に止まり、敵壘間近く進みましたが、早や此時は午後の五時頃で、西舊砲臺の眞んの眞下迄、全く味方は進まれた、濱口中尉は『待て〳〵、暫く其處に止まつて待つて居れよ』と自から進んで敵狀視察に向はれたが、無論此濱口中尉一人ぢやない、一二の下士兵卒は連

れて居られました、之は濱口中尉が敵狀偵察の爲め一人に行つて若しも中途に於て負傷をすると云ふ事があつては、折角偵察の目的が遂げられぬ、夫で中央縱隊長の訓諭の如く、吾若し斃れなば彼れ我れに變り、彼又斃れなば又一人之に變り進みに進んで視察に至り、充分の視察の功を奏せねばならぬと云ふので、二三の人を率いて行かれたので、決して之を目して臆病だなどゝ云ふ事はならぬ、所謂濱口中尉の用意周到なる心掛けと申さねばなりませぬ。

偖て此三人の人は或は伏し、或は進み、漸つとの事に敵壘に接近しまして窃かに樣子を窺ひましたが、最う此時は大分日も傾きまして、西山に隱るゝと云ふ時候であつたからして敵壘を窺ふのには多少味方に便利を得たので御座います、何でもよく〳〵敵壘内の樣子をジッと見て見ますると、左迄多數の敵兵とも思はれない……尤も中に這入つて見るのぢや御座いませぬ、只推

測だから全く小數の敵であるか否かは斷定し惡くい……併し何うしても多數の敵とは見られないから濱口中尉は『オイ〳〵、敵壘に居る兵數は餘りに多數とも見受けられぬが何うぢや、此機に乘じ破竹の勢で突擊を試みたら何うだらう？』と云はれますと兵卒ではあるが流石は矢張軍人だ、蛇の道や蛇が知るもので『左樣中尉殿の仰せの通り、敵は僅に百に足らずの人數の樣に見受けられます、此の機逸せず突擊を試みたら、なアにが陷らぬ事は御座いません、イヤ確然取れるに決まつて居ます、實際中尉殿の御意見通り、此機を逸する事はなりません、まだ縱隊長殿の致されました訓諭も未だ耳に殘つて居るぢや御座いませぬか、直に此儘是非とも突き込みなさつたが宜敷う御座います』『イヤ、僕も今左樣考へてるのだ、夫では窃かに此處を一先づ退いて突擊準備を整へ樣』と、只一發も味方の方からは打ち出さずして引返し、準備を整えて忍び寄つたのは早や日沒過ぎ

で御座います、時分は良しと、敵砲臺眞下を指して進まれました、サアこれを認めた敵の哨兵は、何か一聲高く叫ぶと共に小銃を撃ちましたが、之に應じて後ろの敵壘からは、一度にパラパラ筒先揃えて撃ち出しました、其の彈雨の中に突つ立つて味方の兵を指揮して居られる濱口中尉は先頭に、其他の將校下士卒の銘々は『サア突き込め！突き進め！』と口を揃へて號令を下すと同時に、銃劍揃へて諸方より ワーッと一度に突き進んだが、第一線の濱口中尉は早や敵壘に乘り懸る、此時味方の砲兵からは、始め乘り取つた東蔣砲臺よりは援護の爲めにズドン〳〵と敵壘目懸けて撃ち出しました、之に氣を得し濱口中尉は、忽ち敵の第一線に劍を揮つて飛び込んだ、夫が爲め下士兵卒も『サア中尉殿に遅れてなるものか、進め〳〵』と、死傷數多に出來たれと、難なく踏み越へ乘り越へて、彼が頼みし第一堡壘は我が手に歸した、されば共敵は第二、第三の堡壘に退いて尚頑強に防

禦を始めた、けれ共濱口中尉は必死を期したる事なれば『サア一人も殘らず進むのぢや、是非とも此處を拔かねばならぬ、進め進め、縱隊長の命令通りに一歩も後へは退く事は出來ないぞッ』と非常な勢を以て猛進されましたが、何分此の第二、第三の堡壘は要害堅固で何うしても乘り取れない、折角進んだものも殘念ながら後へ撃退されると云ふ有樣、其處で又隊形を立て直し『サア最う一度行つて見るぞ、突進だ』と三四回も突き込んで見たけれど何の功も奏せない、全部斃れて了う迄だと進まれましたが、矢ッ張駄目で御座います、之が爲め味方には何うも澤山の死傷者が出來ました、第二線第三線とも突擊を行つたけれど矢つ張り何の應へも御座いませぬ、其中に早や八時近くになつて來た、此の滿洲附近は日本の内地とは違つて居て、日の永い時には八時半頃でないと暮にはならぬ、併し此時分は八月の頃で、最う日の永い時節は過ぎて居りました。

八時と云へば最う薄暗い、夫で突擊をするには、日中よりも味方に取りては利益なので御座います、少數の味方ではあるが第三線が已に敵壘に乘り懸けた『サア今一息だ、是非とも此處で立派な戰死を遂げねばならぬ』と、血氣に逸る銘々が、先を競ふて飛び込んだ、折しも濱口中尉はヒユツと飛び來る敵の一彈に負傷をされた、併し濱口中尉の負傷は重傷ではないから倒れ乍ら躍氣となつて『一歩も退く事はならぬ、皆共死ね〳〵、死ぬると覺悟さへして居れば決して取れない事はない、最う僅だ』と頻りに味方を勵ますので、他の將校下士卒も、同じ思ひの事なれば、誰一人の臆病者なく、揃ひに揃ふた必死の勇士、難なく敵の第三壘を入時頃には占領しました、敵は數多の死骸を殘して段々後へ退却を始める、此時味方の兵は至つて少數で、無事健全と云ふのは眞んの數へる丈外居りません、サア此の少數を以て敵壘を美事に占領はしたものゝ、占領と云ふ事を確實

にするのが却々困難である、併し幸にも濱口中尉が重傷でないから、負傷を犯して『サア取れた〳〵、萬歲〳〵』と士氣を鼓吹しながら少數の兵を纏めて居る處に、又々敵は優勢の兵を以て逆襲と出懸けました、例のウラー〳〵の聲と共に我少數の兵に向つて擊ち懸けて參りました、之を見たる味方の兵は『最う之迄だ、少數乍らも一歩も後へは退く事はならぬ』と、必死となつて喰止めに懸つたが如何んせん、最う此時は味方の彈藥已に缺乏し、思ふ樣に戰鬪も出來ないと云ふ有樣、其處で將校下士卒は、各々相戒めて『オイ〳〵、無暗矢鱈に打つてはならぬぞ、確り睨んで、打ち出す丸は徒矢なしと思ふて打て、出たそれ打てッ』それ願はれたと云ふ樣な有樣で、睨み濟まし打ち出したから堪らない、敵は流石に優勢の軍を率いて來ながら、此勢に僻易して、遂う〳〵我軍の占領地へ這入る事が出來ずして元來し道に退却して了つた。然るに此中隊の大將とも頼んで居

た濱口中尉の負傷には、一同餘程弱つたらしいが、他の將校下士兵卒に至る迄『ナニ濱口中尉が負傷をされたとて俺が居る居る』と云ふ樣な鹽梅で、何うか斯うか喰止むる事は喰ひ止めたが、此時も亦味方に大分の死傷が出て來ました、少數の上に兵は益々減ずる斗り、若しも再び逆襲でもして來たら其時こそは最う駄目だ、死ぬるのは覺悟の上だが、折角乘り取つた此の敵砲臺を二度と敵手に渡すのは如何にも遺憾至極である、其處等邊りに倒れて死にかゝつて居る重傷者も遺憾に思ふて『殘念だ殘念だ、最う一少隊でも味方の兵が援護に來て呉れ相なものだ、さすれば占領もいよ〳〵確實となるものを、此まゝ死ぬるは口惜しい次第である』と、夫のみ口にして居つた、此時分に始め東舊砲臺を占領された處から、旅團長の一戸少將は竹内部隊を後ろに率いて、此有樣を見て居られた、此の竹内部隊と云ふのは後備旅團の事で御座います、其處で一戸少將は、濱口中尉の

少數の兵は今や西舊砲臺を占領したが、暗くて確とは判らぬけれ共、何だか敵は優勢の兵を以て逆襲をして居るらしい、之は一時も猶豫は出來ぬ、サア進め！』と云ふて、一戸少將は竹内旅團の三上、山本と云ふ二つの隊を以て濱口中隊の應援に充てられたので、此の兩大隊が一時にワーワッと喊聲を發して飛び出した、此の東舊砲臺から濱口隊の占領して居る西舊砲臺迄は左程遠い事も御座いませぬから、間も無く濱口中隊の左と右の側面から攻め寄せた。

濱口中尉の率いられる僅かの兵にさへ喰ひ止められる敵兵だから堪らない、此三上、山本の兵が左右から最も猛烈なる攻擊を與へたから敵は遁かに逃げ始めた、其處で濱口中尉始め、重輕傷者に至る迄、愉快々々、援隊が來た萬歳々々』と非常な悦びで、間には之が爲めに氣絶をしたものさへあつたと云ふ事で御座います、全く此の三上、山本の援隊が着した爲めに、愈々奮

砲臺の占領は確實となつた譯で御座います、之も偏に一戸將軍の指揮、其宜しきを得たからであります、一口にお話しすると一寸の樣で御座いますけれど、此戰が濟んだ時は既に午後の十一時を過ぎて居つたので御座います。

然るに此の東舊砲臺と西舊砲臺とは美事占領はしたけれ共、此時の日本軍の有樣と云ふは實に悲慘其極に達して居りました、數日の戰ひで御座いましたから半分以上の損害を蒙つて、適ま生き殘つたものも非常の疲勞で、疲れ切つた有樣は實に見るも氣の毒な樣で御座いました、恁う云ふ有樣であるから、各中隊の兵とも入亂れになつて居りますと、此處に一中隊があれば夫に五中隊の兵も遲入つて居れば、十中隊の兵も混つて居ると云ふ樣な具合で、大隊でさへ程よく纏つて居ないと云ふ形になつて居りました、斯く云へば日本兵は實に不規律極まつて居ると思はれる樣だけれ共、決して日本兵が不規律だとか、或は指揮將

校が惡いとか、兵が臆病で亂れたと云ふのではない、連日の闘に加ふるに激戰と來て居るから、打つかつた中隊の全部が死傷すると云ふ樣な個所もあつたから、或一方の中隊を持つて來る又或中隊は死傷者が多くて突擊の部員が少ない、すると一方の割に死傷者の少ない中隊から幾人かを繰り遣つて、足りない處へ組合せる、と云ふ樣な都合からだん〳〵斯樣になつたので、其處の處は旨くお嚙分けを願はんければなりません。斯樣な難儀の態なれど、敵壘占領を確實にする爲め、又逆襲を防ぐ爲めには半時も早く、工兵隊に賴んで防禦工事を施さねばならぬ、其處で一戸少將の率いられる一隊が東舊砲臺を守り、竹內少將の一隊が西舊砲臺を護る、恁う云ふ風にして、其中に部隊の整理を爲し、又一方には工兵隊の防禦工事を始めさせられました、此の竹內少將は始め申し上げて置きました通りに、後備旅團で御座いますから、其處の處はお忘れにならない樣に

一寸一口念の爲めに申し上げて置きます。

偖此の工兵隊は前以て申上げました、杉山大尉が主となつて指揮を執り工事を始めて居られました、處が此時分に敵兵の二三名の者が逃げ後れたのか一寸した木蔭の横から逃げようとするのを見付け出し俘虜としましたから工事の傍ら將軍は、敵の狀況を詳かにお訊ねになるけれ共何とも答へない、旅團副官が段々尋ねて見るけれ共、容易の事に實を吐かない、騙し賺して漸く此の事に、遂に彼等も實を吐いた、何と云ふたかと申しますと

『一旦此の堡壘を取られたけれども、此後大舉して逆襲を爲し兩砲臺を領り返さうと云ふ事に大概決して居る』と云ふ事を申しました夫で味方は大いに警戒を爲し、防禦工事もまだ出來てないのに逆襲をされては堪らぬと、杉山大尉は必死となつて指揮を傳へて居ります、然るに工事のまだ半分も出來ない中に敵の兵が四五十名計り遣つて來た、此の四五十名が遣つて來た

のは東舊砲臺の方で御座いますが東舊砲臺の方とて防禦工事はまだ少しも出來上つて居ないので御座います、而も第一線に出て居た日本兵は至つて少數だつたものですから、此の四五十名の攻擊に已なく退かねばならぬ有樣となつた、夫は何故かと云ふと、散兵壕に這入つて居て攻擊の防禦を行ふより何でもない事であるが、まだ味方の方には此の散兵壕と云ふのが出來て居ませぬ、夫に夜は明けかゝつたし、日本兵は躰全身丸出しの態であるから堪らない、丁度的になつて居る理屈でありますから、只徒らに其踏み止まると云ふのは、敵彈の爲めに皆がやられて了うと云ふ事は分り切つたお話で、且又後ろの方から第一線の警戒兵は一時後方に退けと命じたからで御座います、サア我軍の第一線がジリ〳〵退きましたから此の態を見た四五十名の敵兵は『ヤア今だ〳〵』と云ふ樣な調子で非常の勢で進んで參りました、處が之迄段々後ろの方へ退いて居られた日本の兵

も、最う之から以上は一歩も退いてはならぬ、一歩も敵を進ませてはならぬ、死んでも退くなと云ふ命令と共に味方の方からも一齊にバラ〳〵打ち出しましたが、何分防禦工事は未だ充分でない處から、どうも思ふ樣に擊退も出來ませぬ、併し幸の事には敵の方より味方の方が餘程高くなつて居る、敵は低い所から登つて來る、味方は高い敵は低い、其處で頓智の杉山大尉は『工事に用ゆる爆藥を投げ下せ、早く早く』と指揮しましたから、之を聞いた工兵隊の人々は、防禦工事より餘程此方が面白いものだから『サア行れ、サア投げ』と云ふ樣な鹽梅に爆藥の導火線に火を點けて、上から下へ、敵を見懸けて投げ下したからサア堪らない、此奴に一つ打つかつた奴等は手も足も斷され、虛空を指して飛び揚ると云ふ慘狀を露はしました、けれども世界に誇つた露西亞兵で、まだ生殘つて居るのは、ドシ〳〵味方の方を指して遣つて來る、併し乍ら始め遣つて來たの

が僅か四五十名であつたから、此の爆藥の爲めに半分の死傷者が出來たとすれば遣つて來るのは二十名、足らずである、けれども何れも決死の態で守備兵の居る所迄登つて來た、最う恁うなつて見ると爆藥も味方に危險だと云ふ處から駄目である、愈々以て劍先のつゝき合ひである、將校はシャーベルを以て下士以下は銃の先に劍を附けての接戰である、僅か二十の敵兵なれど猛り狂つて此處に露はれるかと思へば彼處に顯はれ却々猛烈に鬪ひましたから約一時間計りを費しまして漸く敵兵は斃れて了い僅かに生殘つた四五人の者は生命大事と逃げ出してしまひました。

然るに此時分に西砲臺にも大部の逆襲が御座いました、此の西舊砲臺に參りましたのは東舊砲臺に遣つて來たのより餘程多く確とは判りませぬが何でも七八十名は居つたらしう御座います而も前後二回の逆襲をして參りました、始めの一度は僅かの兵

數で瞬く暇に打ち退けましたが、退くと間もなく一緒に纏まつて遣つて來た、併し敵の方に地の利が惡く、之も大した戰もなく打ち退けました、最う大丈夫だと思つて居たら又々遣つて來た、此の三度目が兵數も大分多く、前申し上げました樣に、七八十名も居つたので御座います、夫で味方の方も『サア覺悟をせよ、今度は大分人數も多い、油斷をしたら取り返されるぞ、オイ〳〵味方は姿を顯はしては惡い、姿を出すと撃たれるぞ』と云つて待つて居ると、敵は累々たる死骸を乘り越え〳〵、我が第一線に進んで來て、敵の先頭隊とも云ふべき兵は間もなく我工兵隊の塹壕の胸壁を乘越へ蓦然として躍り込んで來た、されば此處でも亦非常の激戰が始まり、最も近距離で撃ち合ひましたが、敵も去るもの、全部斃れる迄は退かぬと云ふ樣な勢で、味方は意外の苦戰に陷りましたので、多少日本の方では東舊砲臺の方に應援を乞はねばならぬ樣な有樣に陷りました、其處で

東舊砲臺の方でも援護射撃をしやうとしましたが、非常な接戰となつて居るので、東舊砲臺の方から無闇に撃つたら味方打ちをする愛があるので仕方がない、東舊砲臺の兵を繰り出して應援しましたが、之にも屈せず敵は一歩も退かないものだから双方の死傷者は續々出來て、一時は何うなるものかと、竹内少將始め各部隊長も餘程の心配をして居られましたが、此時非常の決心を以て遂に名譽の戰死を遂げられました老少佐木下勝全氏の働らきのお話が御座いますが夫は此次にてお話しする事に致します。

第四回

此の木下少佐の事に付ては少しお話が横道に這入りますが、之は戰死の當時日本の各新聞にも隨分細かに書いた事が御座い

したから御承知でもあらうと思ひます、然るに此木下少佐の人と成に就ては、もと私の舊友であつたから、仝人の爲めに死を弔ひ旁々細かにお話いたして置き度う御座いますから、之は格別として御承知置きを願ひ度ひ、仝体此の木下勝全と云ふ人は ズッと昔の事は偖置きまして、細川侯が肥後の國に這入られた後の事に付て少し申し上げると木下家は以前は平山と云ふ姓を犯して居られましたが、此の木下と云ふ姓を犯された譯はお預りかりといたしまして、木下氏は熊本の坪井と云ふ處に久しく居られましたのです、勝全君は幼名を彦三郎と云ふて居りました併し此の幼少の時の事は詳しく存じませぬが、十八九から三十位迄の間は非常に武術に凝り固まつた人で、劍術も遣れば馬術も行る、柔術も無論得意とする處で御座いました、而して其性活潑な質で、最も負け嫌ひの強かつた人であつたが、三十を越えてからと覺えて居ますが、陸軍に從事しましたが、從事する

と聞も無く非常に早く大尉になつた、大尉になつたが夫から先が却々昇りが出來なかつたのです、此の大尉から少佐に昇級の出來なかつたのは他に事情のあつたか何うかは存じませぬが、私の考へる處では此の木下と云ふ人は仝体利口と云ふのが少しもなかつた、言ひ出したら最後決して引かぬ性で、上官に對し自分の考へ通りの事をポン〳〵遣り出して、少し今の人間とは變つて居る人で御座いますまア是等の處が昇級には多少の妨げをして居たらしう思はれます、で此の少佐になられたのは、臺灣征伐の時非常の働きを爲し、金鵄勳章を賜はると同時に少佐になられたので、此の餘程變つて居られたと云ふ事は、木下勝全と云ふ自分の名刺に、片假名でキノシタカツタケと振り假名を付けて居たなどでちやんと判るので御座います、夫も勝全を人が勝全と讀んでからならぬので振り假名迄も付して置いたので御座います、夫から兼々人に對つて、君等は竹松梅を目出度

と云ふ譯を知つて居るかと言つて居りました、人が知らぬと云ふと松竹梅を目出度いと云ふ譯は恁うだ、松竹梅を一字宛にして讀むと、まつ、たけ、うめと讀むのである、夫を旨く讀むとまつたきうんめい（全き運命）と讀まれるのである、即ち運命を全ふすると云ふ處から目出度いと人が云ふのである等と自慢相に妙な事を言つて居た男で、勝全と云ふのも勝ち全ふすると云ふ處から斯くは付いたのだ、自分が戰爭にでも加はつたら確と勝つて見せると云つて居られました、恁う云ふ風で變つた人は變つた人で御座いました、煙草も人並みに喫み酒も一升位は飲んで居られたが何う言ふものかスツパリ止めて了うて、老年には別人の樣になり京都の其葛が原の横に細かなる家を構へて住んで居られました。

然るに日露戰爭が始まつたけれども、後備であつたものだから始めか出る譯に行かない、先生非常に殘念がつて『軍人として

今度の戰爭に加はられないなどゝは恥辱も以て極まれるものだ是非とも早く出征したい』と躍氣となつて居られたが、何ぼ躍氣となつたつて、そう自分勝手に出られない、怨を飲んで其葛ケ原の一隅に引つ籠つて居られたが、だん〳〵後備旅團が編成される、ポツ〳〵出發する時が近まつて來た、サア恁うなると木下少佐は默つてすつ込んで居ない、京都から早速大阪へ飛んで出て、師團長の小川中將に面會して、突然持出されたのが面白い『閣下、今度の戰爭には臆病をお用ひなるのですか粢傑をお使ひになるのですか』と云ふのです、此の突飛な問ひには、流石の中將も一時は呆れて居られたが、小川中將と云ふ人も八釜しい方で、萬事抜目なく御承知である、評判高い木下の氣質もちやんと知つて居られたものですか、、知れた事だ『臆病者を戰爭に使つて何の役に立つものか』と云はれますと『夫では此の木下は粢傑だから早く使つて下さい』と突き込んだ、之が

大概の人なら何と云はれたか知らないけれど、小川中將は流石は中將である『ウム、よし使ふて遣る』と萬事引受けられて一方ならぬ御心配があつたから、木下少佐は一層出征の期が早かつたのです、竹内正策と云ふ後備旅團長の配下で大隊長として出征されたので御座います。

前申し上げました通り敵が最後の逆襲を試みた時は、一時味方も已を得ず退却をせねばならぬと云ふ場合に陷つて居たのに拘はらず木下少佐は『前へ、前へ』と其處に腰を掛けたまゝ一歩も退かれないものですから、聯隊長は傳令を出して『早く退却せよ、何故に命令に從はないのだ』と傳へられますと『馬鹿云へ、退却も何も出來るものか、之を見い！』と、傳令に足部腹部の分ちなき數ケ所の重傷を叩いて示されたから、之を見た傳令は『成程之では、退却處か命が無い』と引き返し此由を聯隊長に報告じたから、夫で命令に從はなかつた事が始めて分つた

から激戰の最中なのにも構はずに『木下少佐を連れて來い』と命ぜられましたから、木下少佐を助くる爲めの下士兵卒の一組が、ワーワッと敵彈を犯して飛び込んで遣つて來たから、木下少佐も非常の喜びで、後方へ退かれましたが、此時分木下少佐が、前へ〳〵、飛び込め、突き込め！』と指揮されたのが、賊に敵に取つては大打擊を加へた都合になつて、敵が退却したのも偏に木下少佐の勇猛なる指揮に從つて我軍が勇戰奮鬪を續けた結果に外ならぬので御座います。

然るに木下少佐を抱き上げたる救助の兵士は差し詰め其處に擔架も無いから、抱へたまゝに占領した敵壘の下に卸しましたが其處に幸ひ不完全ながらも一挺の擔架の樣な物があつたから、夫に乘せて歸る途中、餘程命に緣がなかつた人だつたのと見えて、飛んで來た敵の砲彈が頭上にて破裂したから、下士兵卒と諸共に、折重なつて名譽の戰死を遂げられました、木下少佐の

お話はまだ〳〵澤山御座いますけれど、之迄にして止めて置きます。

扨て三十五聯隊折下中佐の戦況に就て、少し正誤を要する處が御座いますから、聊か重復になりますけれどお話し申して置きます、此の三十五聯隊の大隊長、中西少佐、木庭少佐の戦死の狀況は以前お話し申しましたが、此の木庭少佐の戦死されたのは率制軍の方で、折下中佐の一隊とは處を異にして居たので敵の砲壘に乗り上ると直に戦死をされたのであつて、折下中佐と中西少佐とは敵の砲彈が飛んで來て、其砲彈の爲めに、聯隊長と中西少佐とは同時刻に戦死を致されたと云ふのが略事實に近いと云ふ事を突き止めましたから、此處に正誤をいたして置きます。

夫れと最う一つのは只今第六師團の參謀を勤めて居られる佐藤大佐のお話も一寸改めてお話しいたして置かなければならぬ樣に

なりました、此佐藤大佐は第一回の總攻撃の時、即ち二十日の夜前進を始めて、二十一日の午前十時前後に負傷をされました前伺ひましたのには、負傷も何もされずに、折下中佐と同時に進まれた樣になつて居りましたが、夫は全然誤聞で、佐藤少佐は只今申しました通り、二十一日の夜明けから屢々前進をされて、最も敏捷に部下に指揮を傳へて居られたものであつて、軍刀を鞘と共に左の手に掴んだ其儘、彼方此方と駈け廻つて敵の方面に向つて指圖して居られる機、敵の小銃彈が飛んで來て、鞘の柄から鞘に當つて、中つた丸が手の首に當つたので御座います、全体此の負傷をする時に、丸が眞直に中つたのは割合に珍は感ずるのが少ない、丸が逸れて一度當つた奴が横樣か縱樣に飛んで來ると、餘程劇烈な痛みを感ずるものだ相で御座いますが、佐藤少佐は幸ひに鞘に中つたまゝ、丸が夫れ態に中つたのだから、珍も重傷と云ふ程ではなかつたと云ふ事で御座いま

す、併し何うしても指揮を執つて居られると云ふ樣な輕傷では
ない、けれ共佐藤少佐と云ふのは大の勝氣な人で『ナニ之しき
の事』と云ふて遣つて見られるけれど却々思ふ樣にやられない
處に軍醫が飛んで來て、遮二無二其場を退かして治療を施した
治療を受けて見るとだん〳〵痛が激しくて、氣計りイラ〳〵し
て居ても、再び起つて指揮をすると云ふ事が出來ない樣になり
ました、夫を無理に行かうとすると醫官の方では許さない、假
令手でも足でも當り處が惡かつたら一命にも關ると云ふ處から
して醫官の方からは手放しをしない、此の手を撃たれた、足を
打たれた位に、後方に退いて醫官の手當を受けるなどゝ云ふは
一寸聞けば臆病者の樣に思はれますけれ共、醫者の許さない以
上は決して出る事が出來ない、其處で佐藤少佐は二十一日の負
傷後は遂に野戰病院に送られて了はれたのでとう〳〵第一回の
總攻撃に參與されなかつたので御座います、其中に疵は癒えは

したけれ共醫官から內地に後送すると云ふ、夫れを佐藤少佐は
何處々々迄も內地後送に反對をして、醫官の云ふのも用ゐずし
て、遂う〳〵後送丈けを斷はられて、左樣して第二回の總攻撃
には又出て行かれました、而して三十五聯隊の折下中佐の戰況
は又順を追ふてお話しを致します事として、佐藤少佐のお話は
之が事實なのであるから右樣御承知を願つて置きます。
夫から我軍右縱隊の縱隊長松村中將の率いて居られた方面は、
新砲臺と云ふ方面に向つて矢張り二十日の夜から攻撃前進を始
められたのであつて、此方も相變らずの激戰で御座いました、
歩兵第十五聯隊の五十君少佐の負傷を始め死傷者も大分出來ま
した、併新砲臺は先づ容易に占られたので御座います、此方面
の戰況は暫らくお預かりにいたして、旅順港包圍軍の方計りで
はお飽が來てはなりませぬから、之から愈〳〵陽方面のお話をい
たす事にしませう。

第五回

此の遼陽方面に向つたのは申す迄もなく、黒木、奥、野津大將の率いて居られる大部隊と、又別に鴨綠軍と云ふ例の川村大將の率いて居られるのも加はつて居たので御座いますが、總ての關べは未だ出來て居ませぬのみか第六師團の關べさへ未だ完全に出來て居ない位で御座いまして、漸く調べの付いた丈の處をお話し致しますが、其時第六師團の司令部職員の氏名は左に示す樣なもので御座います。

◎第六師團

△同參謀部

師團長	大久保陸軍中將
參謀	騎兵中佐 植野德太郎
全	歩兵大尉 早川新太郎
全	歩兵大尉 安藤晋

而して、最左翼からのお話しをいたしますと、此の最左翼にあつたのが久留米の四十八聯隊であつて、此の四十八聯隊は香川大佐が率いて居られましたもので御座います、先づ此時の聯隊の前進運動からお話しいたします、此の前進運動と云ふのは軍隊の方に不分りのお方には一寸判り惡いのですが此處では單に前進運動と申して置きませう、兎に角前に進むのは進むのですまア夫等の事はお預かりと致しまして、已に戰に臨んだ各大隊中隊の兵は左の如く配置されました。

◎歩兵第四十八聯隊

聯隊長	香川少佐
副官	歩兵少佐 奥村信猛
全	歩兵大尉 香椎秀一
全	歩兵大尉 樋渡盛廣
全	砲兵大尉 馬淵萬次郎

△第一大隊　旗手　笹尾少尉
△第二大隊　大隊長　天野少佐
△第三大隊　副官　本田中尉
△第一中隊　大隊長　川上少佐
△第二中隊　副官　水戸中尉
△第三中隊　大隊長　西村少佐
△第四中隊　中隊長　丸田中尉
△第五中隊　中隊長　志村大尉
△第六中隊　中隊長　佐志大尉
△第七中隊　中隊長　目加大尉
中隊長　笠原大尉
中隊長　相良大尉
中隊長　松尾大尉
中隊長　菊池大尉

△第八中隊　中隊長　赤司大尉
△第九中隊　中隊長　谷打大尉
△第十中隊　中隊長　森中尉
△第十一中隊　中隊長　重松大尉
△第十二中隊　中隊長　鶴田大尉

此の森中尉が中尉として中隊長を勤めて居られるのは何かの間違ひではないか、太尉の間違ひではないか、とお考へになるかも知れませぬが、古參の中尉はまゝ恁う云ふ事が御座います、戰時の際などは猶更の事であります。

元四十八聯隊は遼陽の戰の始まる時は師團の豫備となつて居りました、而してダプチンと云ふ原の東の方に斜なりの山があつた、其處が師團司令部の所在地になつて居りましたから、其後方に八月の二十九日迄居られたので御座いました、處が三十日の午前十時半に師團長から前進の命令が來た、サア其處で四

十八聯隊は非常の喜びで、師團の豫備では戰爭が出來ぬ、戰爭に來て軍をせぬ程馬鹿なものはない、前進命令が來て仕合せだ」と大喜びで直に前進と云ふ事に相なりました、併し一個聯隊の兵を動かすのに「サア行け！」と云ふ樣な具合に行かれない、苟も一個聯隊である「やれ彈藥やれ銃劍、やれ糧食」と云ふ樣な譯で、ヘッと云ふては却々行けぬ、夫で漸く準備が出來てサア前進と云ふ迄には約二時間も懸つたものから、正午頃に兎も角もの前進運動を開始されました、其時は第三大隊が先頭で次に第一大隊、第二大隊と恁う云ふ順序になつて進まれました、此の時第十二中隊の一個中隊丈は豫備となつて殘りましたから第三大隊は第九、第十、第十一の三個中隊を率いて行かれる譯になつて居ります、でいよ〳〵前進開始となりましたから、前面に一帶の高粱畑があつて、日本人の背より高いので、之を利用して、第三大隊の三個中隊は直に第一線に展開をした、而し

て第一大隊は最左翼に全部展開を終り、第二大隊川上少佐の一隊は第二線となつて居られました、此の第三大隊の展開した一端は恰も二十三聯隊の最左翼に連なつて居りました、此の聯隊の向ふ處はグーズヤズキと申す處に在る敵の堡壘で二十三聯隊も矢張り此方面に向つたので御座います、併し二十三聯隊のお話しは後廻しとして先づ四十八聯隊の方からお話しするのでありますが、此グーズヤズキには敵が機關砲を二門据えて、兵數は一個大隊位のものでありましたらう、けれ共前面約六百米突計りの處は、すつかり高粱を伐り拂ふて我軍の前進を見下す樣になつて居るから之に進むのは却々至難の事で、敵は加之半永久的の工事を施して巧みに堡壘を作つて居りました、夫で僅か一個大隊位の敵兵ではあるけれ共、味方の方には何も地物とてはない、適まあつたとしても多勢の兵ではあるし、其處へ避けると云ふ事も出來

ないし、無理矢理に進んだものだから、旅順に均しき負傷者を出したので御座います、從つて隨分と悲慘な事もありますから之から一個中隊宛に分けてお話しいたします、其前に一寸申し上げて置かねばならぬのは彼の機關砲の事であります、今では此の機關砲を日本では機關銃と云ひますが、成程機關銃と云ふのが至當である樣に思はれます、彈が小銃彈と少つとも變らないけれ共戰爭當時は機關砲と云て居つたから、矢張り機關砲でお話しいたします、此の機關砲と云ふものは却々効力がある、夫れけれ共、其の代りにまた却々故障の起り易いものである、夫れが爲めに決して獨立はしない、必らず二門以上を据えて置くものであります、此處にも矢張り二門を据えて居たので御座います。

偖機關砲のお話しはお預かりにして、愈々首山堡攻擊のお話しに移る事と致しますが、此の首山堡と云ふのは、敵も味方も一

般に呼ぶ名稱でありまするが、一番高い處を九十九高地と云ふて居る、此の九十九高地と云ふ名稱はないのですけれ共、卽ち其の高さを測つて日本から附けたので御座います、其の九十九高地の下にマエトウン、ヤグーズヤズイと云ふ所がある、尤とも其の他にも種々に名の附いてる處もありますけれども、我が第六師團の向つたのは先づ前に申し上げた二ヶ所であるから其の他の地名は捨て置く事といたします、此のマエトウンと云ふのは、其の當時マエトウンレと書いてありましたけれども、其の後だん〳〵調べて見ると、マエトウンの方が眞實で御座います、レとンの字は好く似て居る所から或ひは新聞紙などで間違へたものではないかと思ひます、支那の音ではパリトンと言ふ相ですが、文字は好く記憶して居ないから他日調べた上で申し上げます。

扨此の九十九高地の頂上には敵の展望櫓が在つて、夫れから各

所の堡壘へ電話を架設して居るものですから堪らない、我軍の前進運動の有樣を一々知らせ、且は旗を振つて、旗號で我が軍の動靜を合圖して居ります、で其方は我が軍の方からも立派に判つて居りますけれ共、惜しい事には二十九日愈々敵前に近寄つた時分迄は、我が砲兵隊がまだ着して居られないから、其の九十九高地の頂きにある敵の展望櫓を擊つ事も何も出來ない、と云つて小銃彈では固よく屆かない、まあ〳〵砲兵の來るのを待つより外に仕方はないと打ち捨て置きますと、敵の方では悠々として見下して居る、然るに此の九十九高地の頂上には展望櫓計りでいなく、砲兵陣地も頂上の何れにかあると日本の方では想つて居りましたが、其の實、敵の砲兵陣地は其の九十九高地の頂上には無かつたので御座います、と云ふ事はズツと後に判つたのであります、夫れ等の事は後廻しにお話しする事と致します。

第三大隊の三個中隊が齊しくグーズヤズイに向つて前進し、最早や小銃彈が屆くと云ふ處迄に出たかと思ふと、敵は一度に機關砲の掃射を始めました、非常な音を立てゝ、ガタ〳〵〳〵打ち始めたので、サス堪らない、僅かの時間に餘程の死傷者が出來ました、其處で第九中隊の谷井大尉が『之は如何にも殘念だ、まだ味方の兵は一發も擊たないのに斯う遣られては堪らない、嘘大分の死傷も出來た樣だ、之れではならぬ』と、直ちに『伏せ……』と云ふ號令を懸けられましたから、味方の兵はバラ〳〵ッと其處へ伏せを致しました、其處で『打ち方始め……』と一喝號令を懸けられましたから、味方も機を得てバラ〳〵、一生懸命擊ち出しは擊ち出しましたが、之れと同時に谷井大尉が負傷を爲れて其處へバツタリ倒れました『ヤー中隊長殿の御負傷だ』と一兵卒が駈せ付けて抱き起そうとすると『搆うな、ナニ之れしきの事が何でもあるか』と口には言は

れるけれど、身は重傷の思ふ樣に動きが出來ない、夫れで豫備の江島と云ふ中尉が居られたから『大尉殿！此の後は私しが引受けました』と云つて後任となり、必死の働らきを以て指揮を傳へ、古垣特務曹長が夫れに力を添へて『急ぎ躍て……』の聲も嗄々に、右に走り左に駈けり、頻りと指揮して居られまする と、無慘や古垣特務も負傷、將校二人が一寸の間に負傷をすると云ふ樣な具合だから、そう〳〵其の場に長く居られない、其處で『サー兎も角散兵壕を掘れ！』と云ふので、直ちに掘り始めました、敵は夫れと見るより左樣はさせじと大砲小銃の亂射を始めた、此の時飛んで來る砲彈の勢ひと云ふは實に凄まじいもので、敵方の大砲は九珊の巨砲であるが、夫れが何うも味方の出て居る所へ持つて來て、ズドン〳〵と落ちて來るのだから堪らない、之れには左しもに勇敢なる日本兵も餘程閉つたらしく、士卒の士氣消沈した樣な有樣で御座いました、夫で

西村第三大隊長は何うも此方面が手薄い三個中隊ではとても思ふ丈の働らきも出來ないと見て、直ちに副官を呼んで『おい副官々々、丸田中尉、どうしても此の方面は三個中隊では持て得れない、是非一つ增援隊を請求せなけりやならぬから、君一つ大急ぎで聯隊長の許へ行つて、此の方面の戰況を簡單にお話しをして、一個中隊でも可いから出して貰つて來い、大急ぎだぞ』『ハイ』と答へた丸田中尉は宙を飛んで漸つとの事で聯隊長の居られる處へ來て、左樣して香川聯隊長に向ひ『第三大隊の戰況は實に慘たるもので、今や苦戰に陷いらんとする、何分兵數が足りませんので、思ふ樣に前進が出來ません、是非共增援隊を送つて頂だきたいものだ、』と大隊長からの御願ひに參りました』斯くと聞かれた香川大佐は、其時分第二大隊を率いて第二線に居られたが、第二線の位置からも無論前面の戰況は見えて居る、兎もすると敵彈もちよい〳〵飛んで來

る、聯隊長は兼ねて、前面の戰況も見えない、丸も飛んで來る憂ひのない處に居られると云ふ事は決して御座いません、香川聯隊長も第三大隊が餘程苦戰の狀態だと云ふ事は、此の時にちやんと知つて居られましたから、此の丸田中尉の請求には、一も二もなく同意して、第七中隊は直ちに急行して、西村少佐の第三大隊に列せよ』と命令を下されました

から、菊池大尉は直ちに前進の號令と共に出懸けたが、此の菊池大尉と云ふ人は、兼ねて僂麻質斯の病氣が御座いまして、此の戰ひの四五日前から一寸與つて居たものですから、サア前進となつても却々思ふ樣に歩行が出來ない、劍に縋つて立ち上り進まうとされるとヨロ〳〵、之れを見た同中隊の中山義雄と云ふ中尉が『中隊長殿！不可ません、夫れで前進が出來るものですか、私しが負つて參りませう』と背を向けると、『イヤ〳〵、之れしきの病氣に、餘計の人數を費かつて何うするもの

か、行つて行けない事は無い、ぢや』と立ち上る途端、其の場へドスンと尻餅を搗く、中山中尉は『其の有樣では困難ぢや御座いませんか』『ナニ、大丈夫だと云つて居るのぢやないか、僅か僂麻質斯位の病氣に負けてなるものか、行ける行ける、大丈夫だ』と口には云へど、何うして一歩も前に運べない、左樣斯うする中に時間はだん〳〵迫つて來る、中山中尉は氣を焦ち『私が』と云ひ樣、引つ攫ふが如く擔ついで飛び出しましたから、中隊の全部はズン〳〵前進を始められました、此の中隊長を引つ擔いだ中山と云ふ人は餘程面白い人で、始終ビールの德利を首から掛けて、ちよい〳〵それを飲んで居る、夫れは砂糖水であります、此の人は酒は余りに飲まない人で、非常に強力家で御座いました、それで強力家で殊に面白い性の人でありますから、兼ねても隨分と面白い話しの種子もありますけれども、夫は後に廻す事といたしまして、強力家の中山中尉は菊池

大尉を平氣に擔ついで駸々進んで、ツイ第三大隊の戰ふて居る場所へ飛んで出て、延進增加をして取る物も取敢えず直にポン〳〵撃ち出された。

丁度此の時分第三大隊の第十一中隊の指揮をして居たのは森中尉で、此の一中隊丈けは西村少佐の方と隨分間隔が遠くして、一寸孤立の樣な姿になつて居りました、夫れで西村少佐の方は第九中隊と第十中隊と、僅か二個中隊の外は居らぬと云ふ樣な塩梅であつたが、菊池大尉の第七中隊の一個中隊が加はつたから漸やく三個中隊となつて居るので御座います、此の三個中隊を以て盛んに干戈を交えて居られました。

第六回

然るに一方第一大隊の方は何うなつて居るかと云ひますに、之

れは天野少佐が全部四個中隊、即ち吉村大尉、佐志大尉、目下大尉、笠大尉と、之れ丈けを率かれて、四十八聯隊の最左翼に進んで行かれました、處が其の道にズーツヤブーツイと云ふ村落が御座います、其の村落の位置が可い處に御座いましたから、天野少佐は一先づ、充分の英氣を入れて、夫れから地形を視察して戰ひをしやうと云ふ考へで、一隊の先に立つて前面の樣子を見られると、之れはしたり意外にも敵がチラ〳〵見えましたから『ソラ敵だ、サー打て……』天地も裂けんばかりの號令に味方の兵は時を得て、バラ〳〵〳〵〳〵と打ち懸けた、打ち懸けられた敵の方でも、一寸撃ち出しては見たものゝ、何で一個中隊位の兵數だつたものと見えて、之れでは堪はぬと思つたものか、餘りに抵抗もせずして忽ち退却を始めたから、天野少佐は旨い〳〵『サア今だ』と云ふて此の敵を追擊さし、笠大尉、橋口中尉、碓井中尉などが最も勇敢なる指揮を爲し、先

頭に立つて驅逐に努め、目下大尉も之れに力を合はせて、進擊を始められましたから、其の中に最う敵は影も形も見えない樣になり、味方には格別の死傷者もなくして思ふ樣に敵を驅逐し目的の地に到着致されました。

夫れで第一第二の二個中隊はつい戰鬪を爲す程迄に及ばなかつたから、丁度第一中隊、第二中隊の人々には、後から來た、第三、第四中隊から先を越された樣に思はれて『何うもお耻かしい次第だ』と云ふて進んで居られました。而してズーツヤプーツイの村落に着したのが頗る容易な業だつたものだから、少壯士官の一同は『戰爭と云ふのは怎麼に譯も無いものだらうか、露西亞々々と誇つては居るが、考がへて居たよりも餘程弱いぞ、此の具合なら何でも無い、直ぐにグーズヤズイも占れて了う、グーズヤズイの占領も易いに定まつて居る、サ……行け……』と云ふ勢ひで、直にでも其の村落を出樣と云ふ樣な有樣

で御座います。

然るに大隊長の天野と云ふ人は一寸の見樣けでは、大した傑の樣にも思はれない、其の人に接せられて話でもなさると判りますが、極温和い話し振りで、一向物に誇り氣の無い、オットリした人であるから、軍なぞは餘り上手らしくも想はれませぬが、事實は夫と反對で、眞の沈勇とは怎麼人に申す事であります、此の天野少佐は、何處の戰鬪にでも拔軍の功を奏されて、殊勳の金鵄勳章を戴だかれた樣な人である、左樣云ふ性の人であるから、少壯士官の連中が血氣の勇に逸つて、今この村落を出て行かうと云ふのを止めて『オイ〳〵何をするのか、今途中で少數の敵を驅逐して村落に這入つたのが、餘りに好都合に行つたものだから、何處でも怎麼具合ひに行くものだと思つて居る、馬鹿な事だ、成程今にして之れを取るのは或ひは取れるかも知れぬ、併し師團長の報達にも先驅功名はする事はな

らぬと訓戒してあるでは無いか、そこいらを考がへたら、假令今此の敵壘を占つて取り得たとしても、直に敵の逆襲を受けて今の形勢が一變して、或ひは之れを捨てゝ退ぞくに已を得ざる樣な場合に立ち至らぬとも限らぬ、若しも左樣なつたら何うするのか、一旦領つた堡壘を捨つると云ふは不利益此の上も無い事だ、今の場合其麼に急いでは宜敷くない』と、部下に對し懇々説き示されたので、一同も成程と悟られたらしく其まゝ默つて了はれた。

其處で大隊長天野少佐は各中隊長其他の將校と共に、地形右左の視察をして居られると、一個大隊計りの敵兵が前斜めに延い て居る鐵道線路の横から顯はれて駸々進んで來る、之れを見た數多の將校は、大隊長の話された事が耳を離れない中に果して敵が遣つて來たので、流石は大隊長の値打がある、若しも我々が彼の時進んで行つて、彼の敵に打つかつたら、どんな羽目に

立ち至つたかも知れぬ、油斷大敵だ』と云つて居られる處に、敵はパリ〳〵猛烈に擊ち始めた、其處で味方も直ちに散開して之れに向つて射擊を始めたが、何分此の第一、大隊の居る處と、第三大隊の西村少佐の居られる處とは、餘程の間隔が御座いまして、一寸の間には會はないと云つても、假へ增援隊をとしたから、眞の最左翼で、而も前面一帶に水溜りがあつて、陣形云ふ處、何でも敵が進んで來たのは第一大隊の左翼の方から廻つて來たらしい、併し今となつては何處かとしては甚はだ宜敷くない、今申し上げました樣に一個大隊の外は急に增援隊を得ると云ふ事も出來ないから却々迂かりして居られない、萬一此處が破れるとすると、四十八聯隊全部の失敗に歸する樣な場合ひに陷るかも知れないと云ふ大切な場所である、殊に心配を致されて、戰ひの中にも少しの抜目の無い樣から、間もなくして吉村大尉が負傷をさに指揮を傳へて居られると、

れた、之れに續いて下士兵卒も若干名は殺れたが、味方に大した損害はない、將校には吉村大尉が負傷をされた計りだから、難なく喰ひ止めて敵に一歩も進ませない。大隊長は吉村大尉の負傷を悟つて『吉村大尉は、負傷ぢや無いか、サア早く退ぞいて手當をしたが可い、代りは直ぐに拵らえるから早く退ぞけ』と云はれると、吉村大尉はカラ〳〵と笑つて『大隊長御心配御無用で御座います、幸ひに左の手で御座いますから、軍刀を握るには何も差し支える事も無いので御座いますから、大丈夫です、ナーニ假へ左の手一本が無くなつたとて、此處を去る事は出來ませぬ、いえ去りませぬ、大丈夫此の通りです』と、叶はぬ手を振つて見せ、假繃帶を其まゝ日沒迄戰ひを續けて居られました、而して三十日の日も早や西に傾いて味方の困難は時々刻々迫つて來る樣になりました。

先づ四十八聯隊の戰ひのお話しは之れ位で止めて置くと致しま

す、夜に入る迄は別に變はつた事も無かつたので御座います、暮れ近くなると漸やく日本の砲兵が到着した、其處で歩兵の戰ひは申し合せたのでも無いのに、敵も味方も戰ひを止めて、只睨み合ひの姿でありました、日沒少し前からは直ちに砲戰で御座います、野戰砲兵第六大隊原大佐の率ゆる方は、何故恁麼に延着をしたかと云ひますと、道は非常の泥濘、加ふるに支那の滿洲と云ふ處の道は雨が降れば川となると云ふ樣な鹽梅で、道路の修繕などゝ云ふ事は一寸も無いから、雨が降つたら最後、泥濘脛を沒すると云ふ樣な有樣となり、幾ら躍氣となつて輓かしても、野砲なんかはちつとも動かない、砲兵の砲車を歩兵も押すと云ふ樣な難儀の土地であつた爲め、斯く延引したので御座います、夫れで砲兵の疲れと云ふものは非常なものでありましたが、それでも搗はず着すると、同時に、敵陣に向つて直樣開戰、九十九高地を眼懸けて砲火を交へて居られました、始じめ

申し上げました樣に、我が砲兵からは前面の九十九高地を標準として撃つて居られたので御座います、然るに敵の砲兵陣地は我が軍の射撃の標的となつて居る九十九高地の頂上ではない、夫れで味方の砲弾は何も無い處を撃つて居た樣な譯で、反對に敵の砲弾は隨分的中する、夫れは九十九高地の展望櫓が眼下に我が陣地を見下して居て、露西亞の方に旗號或ひは電話を以つて知らせるから、距離は兼ねて測量し濟ましてあるものだから堪らない、敵の巨砲弾はどん〳〵味方の陣地に飛んで來るので我が砲兵は若いた計りにて非常の苦戰に陷りました、去れと我が砲兵は少しも陣形を崩さず、夜に入つてまで砲撃を續けて居られました。

然るに前に申しました左手に負傷をされた吉村大尉は、夜に入ると吉丸大尉に後を頼んで、後方の繃帶所を差して歸つて來られます、丁度吉村大尉が香川大佐の居られる處へ來懸かります

と、之れを眼に止められた聯隊長は『オー、吉村大尉ぢやないか、君何うしたのだ』と尋ねられるから、吉村大尉は『イエ、ナニ、左の手に少し計りの負傷を致しましたから、今大隊長に願つて繃帶を頼みに遣つて來ました』香川大佐は『ムー左樣か最う負傷をしたな、大戰鬪での名譽の負傷、お目出度う〳〵』と云はれましたから、吉村大尉は只苦笑ひをして下つて行かれました。

偖て三十日の夜は早や更け渡る十二時近くなつて來た、其處で聯隊本部にありては副官名塚大尉が旅團長小泉少將の居られる處に飛ぶが如くに命令を聞きに遣つて來られました、之れは時々命令が出はせぬかと、日の中には二度か三度、聯隊本部の方から旅團の方へ人を遣つて見られる事が御座います、尤も此の三十日の夜に名塚大尉が飛んで來られたのは『三十日の夜の十二時前後命令を聞きに來い』と云ふ樣な意味の達しが旅團司令

部の方から、聯隊本部の方へ着いて居たらしく、夫れで名塚大尉が飛んで來られたので御座います、夫れで小泉少將は名塚大尉を見られると『オー御苦勞ぢやつた』と挨拶をして、直ぐに口頭命令を授けられた、總体命令と云ふものは御承知の通り書いて遣はすのが正式で御座いますが、至急を要する場合は此の口頭命令と云ふのが始終あります、夫れで此の時は餘程時間が迫つて居たものですから、即ち口頭で以て

三十一日の午前二時を期して夜襲を爲せ

と云ふ命令を下されました、そこで名塚大尉は此の口頭命令を受けると、直ちに聯隊本部の方へ歸らうと致されると、小泉少將が『一寸待てッ、お前一人で來たのか』と云はれるから『左樣です』と答へると『怎麼時に一人で來ると云ふ事があるものか、必らず傳令を連れて來るものである、若しも君が途中で斃れれば何うする、今の命令は誰が傳える、遂う〳〵傳へる事が

出來ぬぢやないか』と叱るが如く論されましたから、名塚大尉は、今晩小官が一人で遣つて參りましたのは至極惡ふ御座います、併し旅團長殿、今夜の御命令は私しの一命のあらん限りは傳へます、假令身に數彈を被つたとて何うがなして傳へます』

と勇氣面に顯はして誓はれましたから『よし、夫れでは早く歸へれ！』と急き立てられた。時計の針は十二時少し廻つて居りますので、二時迄とすれば僅か一時間半と少し外に無い、夫れも本部に皆が集まつて居れば何でもない事だけれ共、先から先へと命令を傳へんければならぬ、非常に時間が迫つて居るものだから、名塚大尉は拍車を打つて宙を飛んで急いで居られるが夜間であつても敵の方からはポン〳〵探り擊ちを遣つて居るものだから、名塚大尉の進んで居られる前後左右にポシリ〳〵と敵の小銃彈が落ちて來る、其處で名塚大尉も考へた『成程怎麼に敵彈が飛んで來たら大變だ、何も彈に中つて死んで了つたと

て、死ぬるに命は惜しくはないが、今此處で自分が死んだら、旅團長の云はれた樣に誰一人として此の重大なる命令を傳へる者がない、若しも此の命令を傳へる事が出來なかつたら、自分は死んでも申し譯が無い』と心配をして、敵彈を冒しながら漸くく本部に着すると、漸くホッと一息吐き流して『先づ〳〵之で、今夜の任務は盡くされたものだと云ふ樣な顏付で『聯隊長殿、只今歸りました』『命令は何うちやつたか』『ハイ今夜の二時を期して夜襲をせよと云ふ命令で御座いました』『ナニ、午前の二時と云へば最う間は無い事だ、之れは大變だ』と顏ぶる驚ろかれたが、『夫れでは兎も角此の事を西村少佐と天野の少佐にも傳へんければならぬが、誰れを傳令に出さう、副官々々、君甚だ度々御苦勞だが天野少佐の方に行つて與れ玉へ、さすれば西村少佐の方には兵を出す事にしやう』と、暫らく考へてから『おオイ、誰か第三大隊の本部迄聯隊の命

令を傳へに行く者はないか、傳令は居らぬか』と大聲で呼ばれると、聲に應じて飛んで出たのは第五中隊の岡本と云ふ一等卒であつた『オ！岡本一等卒か、此の傳令が立派に出來るか』『ハイ出來ます、立派に行つて御覽に入れます、夫れでは第三大隊の西村少佐の許に行つて、今晩の二時を期して夜襲をせよと云ふ命令を傳へて來い』と云はれました、全体此の傳令と云ふものは、例へば『今晩二時を期して夜襲をせよ』と云ふ命令があつたら、其の通りに繰返へして、今晩二時を期して夜襲をせよで御座いますか』と念を押して、其の通りだ、可し』と云はれて始めて出て行くので御座います、で岡本一等卒も其の通りにして『今晩の二時〳〵』と心の中でも繰り返して第三大隊の西村少佐の許へ飛んで行くので御座いました。

然るに一方名塚大尉は、天野大隊の方に行かなければならぬが馬上では何うも危險らしい、と云つて徒歩で行けば、隨分距離

が遠いから、到底時間の間に合はぬ、何うしたら可いか知らと考へて居られましたが、エヽ、儘よ、敵彈に斃れたら夫れ迄の事だと、直ちに馬にヒラリと跨がりて、勢ひ猛く乗り出しました。

一寸此處で申し上げて置きますが、此の晩の夜襲は大部隊の夜襲でなく、四十八聯隊全部の夜襲と云ふのでもなかつたので御座います。

扨て天野少佐の方に向はれました名塚大尉は出來るだけ近路を取つて成る可く早く第一大隊の本部へ着せんければならぬと、多少の障害物があるとも乘り越え〳〵進つて來た、然るに此の天野少佐の居られる處の前面には廣い中凹地があつて、夫れに水が溜つて居る、之れを横切ると大分な近路になるのだけれど却々通れ相にも無い、併し聯隊長からも『成し得る限り急進せよ』と云ふ事を言はれて居るものだから『ナニ之れしきの水溜

を、ワ』と、馬を其の凹地に乗り入れてトツ〳〵と少佐の許へ間も無く着して、立派に夜襲の命を傳へて其場を立出でゝ歸り駈つた、歸り駈りはしたけれ共、何うも岡本の事が氣に懸つてならぬ、二時と云へば最う間もない事なのに若しも岡本が傳令を完うする事が出來て居なかつたら大變だ、第一大隊計り夜襲をした處で第三大隊が活動せんければ今晩の奏功は到底六ケ敷い事だ、折角此の方角に來てゐるから第三大隊の方に行くのにも、餘り遠くはあるまい、折角の事だから念の爲め第三大隊の方にも行つて、岡本の樣子も見屆けた上、若しも達して居なかつたら自分が傳へんければならぬと、何は兎も角行つて見ようと云ふ考へを起して、本部の方へ歸りつゝあつた馬の頭を第三大隊の方面へ引き廻し駈々進んで居られると、向ふの暗い處に黑い影が彷彿して『ウー、ン〳〵』唸つて來つゝある、名塚大尉は『オヤッ』と、思つて駒を止めて暗に透してよく〳〵見る

と、何だか其の姿が岡本一等卒の姿そつくりだものだから、其處へ來るのは岡本ぢやないか』『ハイ、岡本で御座います、貴方は名塚大尉殿ぢや御座いませんか、副官殿ぢや御座いませぬかたら、岡本だな、命令は傳へたか』

『オー左樣だ、誰かと思つたら、夫は何より、して君はウン〳〵何か唸つて居るぢやないか』『ハイ、只今歸る途中一發撃られました』

『ナニ撃たれた』『ハイ、足を撃たれて思ふ樣に歩けなくつて困つて居ます』之れを聞くと『可愛想に』と云はんとしたが、左樣云へば其處で落膽して命を落したら猶悪いと思つたから『ナニ夫れ位の疵は大丈夫だ、足部の負傷は格別意に介せんでも可い、併し復命は急ぐに及ばん、要心して歸つたが可からう、今夜の動功は確かに僕が認めたぞ』と言殘し『岡本が彼あは云ふけれど萬一間違つて居てはならぬ』と傍ほも進んで第三大隊の西村少佐の許え來て見ると、ちやんと夜襲の起きが傳へてある

其處で始めて安心して聯隊本部に歸つて來られた頃は最う大分時計の針が二時の處に迫つて來て居る。

右の命令に接せられた西村少佐は、兎も角も此の暗夜に乘じて夜襲を行ふと云ふ事であれば地形捜兵が第一必要だ、此の地形捜兵と云ふ事は怎麽時に行ふ計りでなく絶えず行つて居られます。そこで誰れか此の地形捜兵の任に當るべき人もがなと選む中、第九中隊に豫備伍長で荒木喜三郎と云ふ人が居ると云ふ事を考へ出されたものですから、直に此の荒木伍長を呼んで、夫れに二名の兵を授けて此の地形捜兵に出される事になりましたやうも思う云ふ任務を授けるには現役よりも豫備の方が馴れて居るから可いと云ふ處で、多くの場合豫備の人が其の任に當つて居る、荒木伍長は斯樣な譚からして此の重任を命ぜられたから、雀躍をして授けられた二名の兵士を率いて、早や二時近くと覺えし頃、肅々として大隊本部を出發いたしてしまひき

した。

而してだん〳〵進んで居るけれとも眞つ暗がりの事であるから、敵も一向悟らない、丁度敵壘の眞下迄到着しました『オヤ最う敵壘だ』と胸の中で考へてよく〳〵透して見ると、敵は巧に散兵壕を作つて其上に高粱を伐冠せてある、其處で手を分けてだん〳〵調べて敵の散兵壕の具合が立派に判つたから、荒木伍長は此の場を此のまは之れで十分任務は了へた、けれ共荒木伍長は此の場を退く事を好まない、其處で二人の兵を傳令として西村大隊長の許に送り敵の方面は怎うだ、地形は斯うだ、敵壘の構造は斯〳〵であるといふ事を報告し、自分は一人殘つて居つたが、後ろの方からは今の傳令が最う進したものと見えて、西村少佐が各中隊を指揮して已に前進を始められた模樣である、併し日本の兵數が餘り深山でないから自分も死ぬるに定まつて居る、其處で考へた、之れは何うせ自分も死なねばならぬが、寧ろ死ぬ程なら第一先頭に立つて死んで遣つたが氣持ちが可いと、流石兼人の中から選り出されて、此の重任を負はされた丈けに豪傑である、夫れで直に敵壘に取り付いて銃の先に劍を附けたまゝヒラリと中へ飛び込んだ、之れを見た敵の哨兵は忽ち銃劍を揮つて突いて懸つたから『ナニ小賊な』と之れに向立つて居る處え横の方からもツル〳〵と突いて懸つた、之れはならぬと荒木伍長は二人を對手に戰つて居ると、又しても一人突いて懸つた、都合三人で以て荒木の一人を取り圍んだから、荒木も今は絶体絶命である、最はや到底助かる見込みは無いと思つたから前面に來た敵を對手に戰つて居れば左右から突いて來る『エヽ』と計り銃劍の投げ突きをした、幸ひにも夫れが目的通り敵の胸部を貫いたから堪らない、悲鳴を擧げて其場に倒れて了つた、之れを見ると左右の敵が眞つ蒼に突いて懸つた、最う荒木には寸鐵もない、之れでは犬死にする計りだ、犬死にしては

殘念だと呟く間に考へたから、暗にまぎれて又してもヒラリと其の場を飛び出し、落ち込んだ處が丁度茄子畑であつた、夫れで落ち込んだまゝ仰向に其處へ寢て了うた、此の邊りの茄子畑と云ふは實に溝が深くて、少し小男は蹲んで居れば分らない殊に茄子の木が繁茂して居るものだから、溝の中へ寢て居る荒木の姿は到底敵方に見えない、敵はワー〳〵云つて捜して居るけれども一向に近くには寄つて來ない、其中に味方の夜襲も激しく、敵方からも非常に激しく撃ち出しましたから、荒木一人は戰ひ如何にと茄子畑の中から窺ふて居りました。

を捜す處の騒ぎやない、何れへか行つて了うた、其處で荒木は却説第三大隊西村少佐の率いて居られるのは、第九、第十、第十一、此の三個中隊の外に、第二大隊の中の第七中隊が加はつて居りました、之れは前申し上げました通り、第三大隊の増援として加はつて居られるので矢張り西村第三大隊長の指揮を受

けて居られたので御座います此の四個中隊が地形捜兵の報告に接すると同時に直に前進を開始しました、處が敵は早くも夫を覺知したものと見えて、機關砲と小銃の火蓋を一時に切つて放つたから堪らない、忽ち四五名はバタ〳〵其處へ斃れて了つた、而も此の時默つて居れば良かつたのですけれ共、悲鳴を擧げたのぢや御座いませんが、倒れた兵共が殘念々々とか何とか聲を發して叫んだものですから、敵は之れ等の聲を聞くと同時に、非常に猛烈な射撃を始めたので、實に一歩も進まれない、併し西村大隊長は何うあつても、どんな苦戰に陷つても是非取らうと云ふ考へであつたから「前へ〳〵」と眞ッ先に立つて進んで行かれる、夫れに續いて同副官の丸田中尉も遅れてならじと殿れし味方を踏越え〳〵進んで居られましたが忽ち飛び來る敵彈に、今や敵壘も間近く見えし處で、西村少佐と丸田中尉は相前後して名譽の戰死を致されました。

併し暗夜の事でありますから、此の二人の人の側に近くに居た者さへ少しも識らない、一番近くに居た第九中隊長の代理をして居られた江島中尉で御座いましたが、此の人も矢張り大隊長と其副官が斃れたのを少しも知らなかつたので御座います、然るに今の先迄大隊長が自から『前へ〳〵』と頻りに號令を掛けて居られたのに、其の聲が薩張り聞えなくなつたので、何うも不思議だ、今迄聞えて居た大隊長の聲が聞えなくなつたとは變だ敵味方の銃砲聲が一段激しくなつたから聞えないのか知ら……でも今迄聞えて居たのが、少し位銃聲が劇しくなつたとしても聞えない樣になる理屈は無い筈だ』と思つて暗夜乍らも透して見ると其附近に斃れて居る味方の數は夥だしいもので、實に眼も當てられぬ悲慘の狀況で御座います江島中尉も之れを見ると驚した、之れでは何うも進めない、怎うも怎麼に味方に死傷を出してからと云ふものは、よし進んだとしても、全滅するより

外はない、之れは一先づ退却して時機を俟つて再び突き込むのが味方の利益だと考へられたものだから、遺憾進る方無いけれど共『後え……』と泣く〳〵號令を下し、一先づ味方の散兵壕の處迄退かれましたが此途中江島中尉も負傷をいたされ、早瀬中尉が戰死を爲し、古垣特務曹長は頭部に重傷を負ふて倒れ、岡本少尉は右の眼を撃られました、斯樣な塩梅に第九中隊は將校が戰死或は負傷をされたものですから、下士兵卒は申す迄も無いので御座います、約半數位の死傷者を出しました、斯の如き悲慘の狀況に陷つて居る一中隊の兵を江島中尉は負傷ながらに纏めて味方の散兵壕迄退かうとは隨分困難な事で御座いました扨て一方第十中隊は何うかと云つて見ますと之れも相分らず悲慘の狀態で、畫の戰ひに中隊長の森中尉が負傷をして、矢野中尉が夫れに續つて指揮を傳ふる事となり、同じく凄まじい勢ひを以て敵壘間近く近寄りはしたものゝ、相變

らず敵の猛射を受けて何うしても、進まれない、矢野中尉始め高橋中尉、首藤少尉の三人が、何うあつても茲暫く辛抱して敵塁に突き込まねばならぬ『突き込めー〳〵』と味方の死傷者を顧みず、前進をして居られましたが『殘念ッ』とバッタリ倒れたのが首藤少尉で御座います。『オー首藤君負傷か』と矢野中尉が馳せ寄つて見ると、早や戰死をして居られました、其中に今度は高橋中尉が何だか判らない事を『ワー〳〵』云つて居られるから、妙な事を云つてると思つて其處へ行つて見ると、中尉は口の下を撃たれて倒れて居る、最早や第十中隊は矢野中尉只一人の姿となり、必死の勇を振るつて居られましたが、同じく中尉も間も無く負傷をされた、併し矢野中尉は重傷と云ふ程でないから、此處一歩も退いてはならぬ、進め〳〵』と負傷のまゝ相變らず指揮を執つて居られました、之に續いた第十一中隊は何うかと云ふて見ますると、之も相變らずの苦戰で、敵の

機關砲彈と小銃彈とが雨霰と飛んで來る中に、園田中尉と山本少尉が此時先頭に立つて、前へ〳〵と進んで居られましたが其の前に中隊長重松大尉が居られて『餘り進み過ぎては好くない』と云はれましたから、暫く三方の兵を伏せて、其のまゝ射撃を續けて居られましたが、何時迄恁うして居たとて中隊長殿駄目です、サア進みませう』と若い將校は逸り立てる、重松大尉も時機だと思つたから『躍進々々、前へ……』と進み騒つたが、豫備の山本少尉に續いて行儲特務曹長が忽ち戰死、園田中尉が負傷と云ふのだから、下士官兵卒は數が知れない程斃れました、其處で已を得ず重松大尉は暫く隊を止めて伏射を始められた、借てお話は第七中隊に移りますが、之れも相變らず非常の苦戰に陥つた、併し此の中隊には菊池大尉と中山中尉とが頗る勇敢なる指揮をして居られる『ナニ此の位の死傷者を出した』つて構はぬ、苟くも敵の堡塁を拔くと云ふには之れ位の死傷者

を出すのは當然な話しだ、此の菊池が生きて居る間は何うあつても退かぬ、中山中尉が居る間は大丈夫だ』と進んで居られる

と、荻少尉、藤田少尉、木原特務之れ等の人も『ナニ、中山中尉一人が豪傑でもあるまい、俺だつて將校の一匹だ』と、皆口々に勇氣を皷して、躍進又躍進と、敵壘間近かに迫つたが、如何に勇猛なる將校とても飛び來る敵彈には勝たれない、中隊長菊池大尉が忽ち戰死をされましたので、中山中尉が直に代理となつて『俺が居るサー來い』と言も終らぬに股を撃たれた、併し中山中尉は之を味方に知らしたら好くないと想つたから、自分で直樣繃帶を爲し、戰たばしる彈の中を繃帶の足踏み締め、丸を冒して早や先頭に來るかと思ふ頃忽ち敵の數彈を被つた、さしも猛き英雄も其處にバッタリ名譽の戰死、荻少尉は夫れと見て、中山中尉は戰死をされた名譽の戰死、其處で藤田少尉、菊池大尉、中山中尉が戰死をされた以上は、陸軍少尉荻一郎、不肖な

がらも之れから中隊長の代りだ、サア來い』と僅かに進んで此人も亦戰死『ヤー荻少尉が怪我をした』と特務曹長の木原伊太郎が近寄る機に頭部を打ち貫かれて無慘の戰死、其處で藤田少尉が一人殘つて指揮を執つて居られましたが之れ又間もなく負傷をして動けない、此處に至つて第七中隊、將校已に全滅の姿に陷り、或る下士官が中隊の指揮をして已なく其處に停止をせんければならぬ樣な羽目に立到つた、之實に悲慘中の悲慘事で御座います、西村少佐の率いて居られる方面は斯くの通りで、四個中隊ともに何ともお話にならない樣な苦戰の上の又苦戰、死傷者も山なす程であり[illegible]した。

第七回

然るに之れと遙かに離れて居た第一大隊、天野少佐の方は何うか

と云つて見ますると、始め申しました通りに、第一大隊に第三大隊の方へ成可く近寄つて、同じ時刻に夜襲をする事になつて居ましたが、何うしても思ふ様に行かずして、第一大隊と第三大隊とは大部離れて居つた、おまけに其中間に水溜りがあつたものですから、地形上何うして目的通りに連結が出來ないので御座います、そこで第三大隊と手を携へて夜襲をすると云ふ事は覺束なひ話で、天野少佐も之れでは仕方はない、何うしても第三大隊と一緒に夜襲は六かしい、之は別々にしたが可からうと、愈々別に爲やうと云ふ事を決心されました、其處で已に前進を始んめとする時に大隊副官の本田中尉が矢の如く飛んで來た、喘ぎ〳〵『大隊長殿敵の逆襲で御座います』と云はれたから『ナニ敵の逆襲？』そいつは捨て置かれぬと云つて居られる處に第一大隊の左翼の方に敵はパラ〳〵撃始めた、其處で大隊長は、第一、二、三中隊を直に其場に散開さして、敵の

逆襲に對して戰ひを始められた、其中に本田副官は又も敵の逆襲の樣子を確かめんとして少し進まうとすると、咽喉を射られて直に戰死、間も無くして第一中隊の中山特務曹長が戰死をする、第二中隊では末少尉が負傷、第三中隊では志賀中尉が負傷、第四中隊は餘りに積いて第四中隊も戰鬪を開始したが此の第四中隊は餘り損害を被らなかつた樣で御座います併し前申しました樣に、一、三中隊の三個中隊では、將校六名の死傷の外に下士卒若干の死傷が出來たと云ふので多少の損害はあつたものゝ、左樣大した損害と云ふのでもなく、敵の逆襲は盲く喰ひ止めはしたものゝ、此の逆襲の爲めに第一大隊の夜襲は出來なかつた、不成功に終つたので御座います、夫に第三大隊の方も先に伺ふた樣な戰鬪始末で夜襲は同じく不成功、そうこうする中に時間も既に三時近くにもなつて來ましたから、何うなるものかと思ふ中に、三時少し過ぎに更に命令が來ました、其の命令と云ふは同

じく五時を期して二度目の夜襲を決行すべしと云ふ事でありました。

三時も已に過ぎたるに、續いて五時に又しても二度目の夜襲をせねばならぬ、夫れに味方に澤山の死傷者も出來て居る事であれば、隊伍の整頓もせねばならぬ、夜襲の準備が出來て居ないのに、其のまゝ夜襲を爲ると云ふことは出來たものではない、彼れや之れやとして居る中に早や拂曉になつて了つた、其處で遂うく五時を期しての夜襲は已を得ず中止すると云ふことになり、其の中に三十一日の午前六時となつたが、此の時師團命令が出ました。

一、敵に就いては新報を得ず軍は本日攻撃を繼續すべし

二、師團は本日攻撃を繼續せんとす

三、騎隊は昨日の如く位置し攻撃を行ひ漸次軍を進む

べし

但し左翼隊は右翼隊の攻撃進捗に伴ひ、之に連繫して動作するを要す

四、砲兵隊は師團兩翼隊の攻撃を援助すべし

右は命令の要領で御座います、併し此の命令に附屬して軍隊區分等もありますが、夫れ等の事は軍人以外の吾々には詳細に知る事を得ないのであるから、右の要旨にも多少の間違ひはあるかも知れませんと思はれますので、其の邊は然るべく御承知を願ひます。

之れ迄申し上げました樣な始末で、前夜の戰ひは實に悲慘の狀況であつて、三十一日の午前六時、師團命令が出た時分、西村少佐の率かれた第三大隊の進んで闘いました方面の兵を檢して見ると、實に驚くべき減少を來して、健全な者は僅かに六七十名に過ぎない少數となつて居たので御座います、四個中隊と云

へば約八百位の兵數なのに夫れが六七十名しか殘つて居ないとは實に情ない御話しで御座います。此の時分優れて眼に付いたのは十中隊の矢野中尉が、前夜負傷して居るのにも拘はらず、此日は終日、此の六七十名の兵を指揮して居られました事で御座います、斯くの如き有樣となつたから、聯隊長香川大佐は、第二大隊の第五中隊只一個中隊を豫備として置いて、松尾大尉の率いて居られる第六中隊と、赤司大尉の率いて居られる第八中隊、此の二個中隊を、第二大隊川上少佐に授けて、第一線に增加の命令を下されました、此の第二大隊も矢張り四個中隊であるけれ共、菊池大尉の率ゆる前中隊し上げました通り、菊池大尉の率ゆる第七中隊は、前夜第三大隊の方に增援隊として進んで居られる、菊池大尉の戰死を始めとして、殆んど全滅であるから三個中隊しか居りません、其三個中隊の中の第五中隊は聯隊長が握つて居られるから、第二大隊長は二個中隊の外に率ゆる兵が御座い

ません、併し川上少佐の率ゆ此の二個中隊の外に第三大隊の前夜打ち漏らされた六七十名の殘兵が加はる事となり、斯くして三十一日は戰鬪をされたので御座います。

偖て池備が出來て三十一日の午前七八時の頃になると、第六聯隊以外に或大部隊が到着した、而も恰もよし、此時分からして敵の砲兵陣が九十九高地の頂上で無いと云ふ認めが付いたので御座いました、敵の砲兵陣地は味方の方から向つて九十九高地の右手にある凹地にちやんと在つたので御座いました、……此の敵の砲兵陣地が九十九高地の頂上で無くして右手の凹地に在ると云ふ事を何うして發見したかと云ふ事は後でお話しする事といたします……其處で前日迄は其麼事が判つて居なかつたものですから、味方の砲彈は全くの徒矢で何にもならなかつたのです、然るに今となり敵の砲兵陣地が判明したものだから、非常に口惜しがると共に大喜びで、味方の砲兵は全力を盡

くして打出した、其砲撃が眞に功を奏したものですから、暫時にして敵の砲兵隊は全く沈默して了つて一發も撃ち出さない、

『サー旨い、之れで昨日の仇討が出來た、今だぞ』と、云ふので攻撃の準備に取懸り、早や少々づゝ兵を進めて射撃を繼續して居た、然るに敵の砲兵陣地は全く沈默して了つたものゝ、歩兵の方は相變らず少しも動かない、そして距離が遠いにも拘はらず非常な勢ひを以て撃ち立てた、併し幸ひな事には遠距離だものだから割合ひに味方の死傷は尠なかつたけれ共、惡い事には第二大隊長の川上少佐が足部に負傷をされた、足部の負傷で動きが出來ない『ヤー之れは失策だ、所もあらうに大切な足を射られては動きがとれない、昨日の仇討が済まぬ間に負傷と云ふは實に殘念だ、此處は是非負傷をしても行かねばならぬが』と負傷の足を踏み立てゝ見られるけれ共、一向に立たれない、其中に大隊副官の水戸中尉が飛んで來て『ヤツ大隊長殿！最う

御負傷で御座いますか』『オイ〳〵副官！最う御負傷で御座いますかとは非道い挨拶ぢやないか』『ハイ之れは惡う御座いました先驅けの御負傷御目出度う御座います』『併し何も足を撃られたので動きが出來ずに困つて居る』『何う致しまして、ぢや馬上になさいましたら如何で御座います？、イヤ馬上は猶更危險、のみならず夫では、馬上も到底堪えられますまい、一先づ繃帶をいたしませう』『ナニ構うな〳〵』と氣強い事を云つて居られるけれ共其實少しも動きがとれない、其處で遂う〳〵繃帶をして幸ひ拔帶天幕があつたから、夫を擔架の代用として、少佐を抱へて乘せられた、川上少佐は『イヤ、俺が恁麼具合になつて居ては部下に對して何とも言譯が無い、頼むから放つといて呉れ』と辭む少佐を引つ抱え、『イヤ敵彈が來るから不可ません是非後方迄お送りをいたします』水戸副官に命せられた擔架卒は後へ〳〵と急ぎしが、蹌無く飛び來る敵の一彈、如何なる運の極

みにや、擦架卒には中らずに、寢て居る川上少佐の腹部をズドンと撃ち貫いた『アッ』と一聲川上少佐は叫ぶと共に、暫し苦痛の末、それなりに遂に戰死を遂げられました、此時大隊副官の水戸中尉が附添ふて居られましたが非常の愁傷で『大隊長殿……大隊長殿……』と呼んで居られると、又しても飛んで來た敵の一彈に、全中尉は續いて負傷を致されました、第二大隊は右樣の始末となりましたので誰か大隊長の代理を勤めんければならぬ、此時大尉の古參なる赤司と云ふ大尉が衆に推されて、其日の指揮を致されました、此日特に眼立つて見えたのは、昔で云へば非樓なれども、今日の戰時に其麼不便利なものは出來ない、梯子を押立てゝ物見臺の代用とし、旅團長の小泉少將は絶えず其上に登り、双眼鏡を寸時も離さず敵狀を眺めて居られましたので御座いました、何れも小泉少將の豪膽なのには舌を卷いたと云ふ事で御座います、幾度となく副官などは控へて御

座つたがと勸めるけれ共『ナニ、敵彈と云ふものは何處へ居つたつて中る時は中るものだ、高い處に居るからとて、中ると決まつたものでも無い、若しも晩んで撃つ奴があれば敵乍ら天晴れだ、其麼丸には的となつても構はない、盲目撃ちの敵彈には怖れは要らぬ、心配するには及ばぬ』と見て居られたので御座いました。

彼れ是れする中に第一線の方に當つて『逆襲々々』と云ふ聲が類りに起りました、夫と同時に敵の銃砲彈が一頻り飛んで來始めた、香川聯隊長は其中に立つて居られますから危險此の上もない事である、併し香川大佐は吾身を忘れて、聯隊旗の保護は何うだ、聯隊旗が大切だ、如何だ〳〵』と心配される、何故かと云ふと、敵の逆襲が見えたからである、敵彈が飛んで來る位には何も心配は要らないけれ共、逆襲に逢ふては大分夫が氣に懸る、夫に第一線の方から、敵の逆襲だ〳〵』と云ふ聲が傳つ

て來るのが非常に頻繁である、味方の兵は前夜以來頗る惨狀を呈して、此日の朝も大隊長が戰死をすると云ふ位であるから、餘程兵力も衰へて居る、其處へ持つて來て、敵の優勢なる逆襲にでも逢へば、聯隊旗の保全も覺束ないから、聯隊長も心配で堪らなかつたので御座います。

此の時聯隊長の傍らには長束副官が居られました『聯隊長殿其處へ居られては危險で御座います、暫く散兵壕の附近に敵彈を避けられては如何が御座います』と云ふけれども却々動かれない、其處で長束副官は、前夜以來早や二人の大隊長を失ひ、今又萬一貴官が怪我でもなさいましたら、此の聯隊が瓦解せねばならぬ樣な羽目に立至るちやありませんか、棄膽も時に因るもので御座いませう』と餘程諫めて見るけれども用ひない、其處にも此處に中に聯隊長の近傍に居た第五中隊の兵が最う、もバタ〳〵倒れる、之れではならぬと思はれた長束大尉は堪り

兼ね物をも言はずに散兵壕の中へ押落した、『何をするか、無禮なッ』と、云ふては見られたものゝ、之れは決して無禮では無い、長束大尉も聯隊長がもしも怪我でもしたら一聯隊の運命に關する、此の一聯隊が瓦解する樣にでもなつたら夫れこそ大變だ、全軍にも影響を及ぼすと云ふ處から、其處を思つて押し落したのであるから、香川聯隊長も一旦は無禮者と叱られたけれ共、萬事御承知の事であるから、押し落されたまゝ散兵壕の中から、指揮をして居られましたが、其の中に難なく敵を擊退しましたので、敵の逆襲はつひに何等の功も奏さなかつたので御座います。

第八圖

斯樣な狀態で三十一日の日もだん〳〵日遲くなつて來た、そこ

で又三十一日の午後の十時に我軍の方から夜襲をしやうと云ふ軍議が決して、命令が參りました、併し度々申上ぐる通り、味方は前日來の苦戦に因つて、此の四十八聯隊は大多數の死傷者であるから、十時の夜襲と云ふ事に就いて、將校は申すに及ばず下士官迄も必死となつて其準備に取懸つて居られるけれ共却々纏まりませぬ、左様斯様する中に早や十一時も過ぎ十二時近くなつたけれども、まだ夜襲をするには充分でない、何故怎麼に時間が懸るかと云ふて見るに第一人が足りないので夫れを集めるのが一番困難で御座います、夫れに一方死傷者も收容せんければならぬ、戰死者は兎も角もとして、負傷者は何うあつても收容せんければならぬ、此の負傷者の收容は本來は衛生隊が行らねばならぬのですけれ共、衛生隊計りでは手が屆かぬから健全な下士卒が手傳ひをせねばならぬので、益々兵員に不足を告げる、

其の中に早や十二時に及びました、

其處で聯隊長は非常の心配で『十時の夜襲に最う十二時になつたぢや無いか、何うも困つたなあ、まだか〳〵』と、自分も其處等邊りを飛び廻つて部下に對し急き立てゝ居られるけれ共、容易に纏まりません、そこで最はや仕方がない、纏つた丈け進つて了へと、已に前進運動を始めんとする頃、前から闇路を飛んで一名の兵がやつて來た『何者？誰？』と尋ねて見るけれど、只『傳令々々』と云ふて前面を通り抜けて聯隊長の居られる處に進つて來ました、

たる豈間でも軍隊の進んで居る處、或は停止して居る所、只哨兵一人居る處を、兵が通る時分は假令一人にしても傳令は傳令、其他の事にしても何々の用向だと云ふ事を簡單に述べて行くので御座います、傳令などは殊に至急を要するものであるから路み停りもせずに『傳令々々』と呼方の兵を見て飛んで行くので御座います、で今やつて來たのも傳令々々と叫んで來たが其實傳令ではない、彼の有名なる地形捜査の衛に立つたる臨備伍長

荒木喜三郎で御座いました、此の荒木伍長は前申し上げた通り三十日の夜敵壘に飛び込んで銃の先に劔を着けたまゝ投げ突きをなした男で、投げ突きをして一人の敵を倒した迄はよかつたけれど、身には何も無いものだから吾知らず其處を飛び出し、茄子畑の中に飛び込んで打ち伏したので御座いますが、扨て寢て居て樣子を聞いて居ると、露語だから荒木は解しないけれ共、何でも今の日本兵は此の邊に逃げた樣であつたと云ふ樣な梅鹽で捜し廻る、荒木は最う當底遁れは出來ぬものかと思つて居る中に合戰が始まつたから二三の露兵も荒木を打ち捨てゝ行つて了つた、そこで荒木も辛うじて一命を拾つたと云ふ樣な譯で、と云つて之れから味方の方に歸るには飛び出したら夫れこそ大變、何うしやうか、斯うしやうかと考へて居る中に最う夜が明けて了つた、夜が明けて了うと猶更其處を動かれない『之れは困つたな』と思つて居ると、其の茄子畑の附近を、露兵が一人なり二人なり往きつ戻りつする、けれ共茄子畑を捜して居る樣な模樣でも無い『變だなー何う云ふ譯か知ら……』と頻に不審の念を起して、聽音を便りに頭を擡げて見ると、成程其處を往つたり來たりする筈だ、つい其茄子畑の先に水汲みにやつて來るのである『嘘、悪い所に井戸がある、之では一寸も動く事が出來ぬ、去らばと云つて無手に飛び出し犬死にするのも恐な話し、まア生きて居られる丈生きて居やう』と決心はしたものゝ、何うも堪えられない樣にお腹が空いて來た、何うしやうと思つて四邊を見廻すと幸ひ茄子畑で茄子が澤山成つて居る、天の與へと夫を採つて喰はうとすると、敵が絶間なく水汲みに遣つて來るので仕方が無い、そーッと頭を少し擡げて手も動かさず口付けに喰ひ始めた、病氣もしないのに寢乍ら手も動かさずに喰はねばならぬ、寢藁に寢ばり、隨分苦しいけれど命に換へる寶なし、つい三十一日の夜十二時迄左樣して居られたが、幸

ひに十二時になつて敵が或方面に集合し始めたから、其隙に乗じて出て來たので御座います、實に荒木喜三郎氏は幸運な男子である、夫れも其の筈でございます『一富士、二鷹、三茄子』と、云つて夢に見てさへ目出度いと言ふ茄子畑に身を伏せて、下る茄子で身の饑を凌ぎまして、一日一夜を過し身には少しの負傷もなさず、何にもないすびに歸つて來ました、荒木喜三郎氏は斯樣な梅鹽で無事歸つて來ると直に香川聯隊長に報告を申しました。

敵の大部隊は西方より來り、グーズヤズイ東側の地區に集合しつゝあり、想ふに敵は退却を企圖するものならん、終に斯樣に申しました、此の荒木の報告を聞かれると聯隊長は非常の喜びで、何うして歸つて來たかと云ふ事を聞かれる隙もなく「サア今の中に前進だ」と一時にワーッと押し出された、此の

時早や敵は荒木の報告通りに退却しつゝ居つたものであるから敵の方からは最う抵抗しない、彼の有名なる首山堡のグーズヤズイは首尾よく四十八聯隊の占領に歸したので御座います、先づ歩兵第四十八聯隊の戰況は之迄に致しまして、之から又歩兵第廿二聯隊のお話に移ります。

此の歩兵第廿三聯隊は矢張り久留米の四十八聯隊と合せて一個旅團となつて居るので、之も同じく小泉少將が率いられる事になつて居ました、此の聯隊長が江口大佐で

◎歩兵第廿三聯隊

△第一大隊　聯隊長　江口大佐
△第二大隊　同副官　中村大尉
△第三大隊　旗手　井上少尉
　　大隊長　藤少佐
　　大隊長　平山少佐
　　大隊長　竹内少佐

△第一中隊　中隊長　今津中尉
△第二中隊　中隊長　堀中尉
△第三中隊　中隊長　南中尉
△第四中隊　中隊長　牟田中尉
△第五中隊　中隊長　牧大尉
△第六中隊　中隊長　松山中尉
△第七中隊　中隊長　岡田中尉
△第八中隊　中隊長　山口中尉
△第九中隊　中隊長　青木中尉
△第十中隊　中隊長　古庄中尉
△第十一中隊　中隊長　菊池中尉
△第十二中隊　中隊長　安大尉

代理

先づ斯樣な事になつて居ました、此の二十三聯隊は香川聯隊の

向はれた方面、即ち向つて右に位置し矢張りグーズヤズイの堡壘に向つて戰ひを始められたので御座いましたが、廿三聯隊の狀況は命令彼れ是れ、凡て四十八聯隊と同樣であるから、略いたします、尤も戰鬪を始められたのは多少四十八聯隊と違うて或は早く、或は少し遲れましたけれ共、大同小異で却つて細かにお話するのは煩はしう御座いますから差し控えて置いて、夜襲の時は相變らず敵の猛射を受けられたもので一歩も進めない併し乍ら聯隊長を務めて居る江口大佐と云ふ人は二十三年北清事變の時に、扳軍の勳功を奏したる聯隊長で、戰鬪には餘程馴れて居られたものだから、是位の敵の猛射は覺悟の前だと、死傷を拂はずに非常な猛進をされた、そこで第三中隊長の南中尉が負傷をされ、第四中隊の牟田中尉が射られ、第五中隊の牧大尉、第八中隊の山口大尉も同樣と云ふ樣な風で、中隊長丈けで中尉少尉下士兵卒に死傷も一寸四人の死傷があつた位だから、

者が多數出來たのは申すに及ばず實に滅茶々々に擊られたもので、此の第二十三聯隊の苦戦と云ふものは、其の當時聯隊長すら重傷を負ふて働らけなくなつた位でありますから、戰ひの事は多分御想像が付く事だらうと思ひます、此の第二十三聯隊のお話しは四十八聯隊と同樣に、一個中隊宛に分けてお話し致す考へで居りましたけれども、少し調べ漏れのところも御座いますから、後廻はしとして十三聯隊の方をお話しする事と致しませう。

第九回

此の歩兵十三聯隊は歩兵第四十五聯隊即ち鹿兒島の聯隊と一緒になつて所謂一旅團となつて居たので御座います、此の一旅團を率いて居られたのが例の飯田少將でして、十三聯隊の組織は

左の如くなつて居ました。

○歩兵第十三聯隊

聯隊長	吉弘中佐	
同副官	入江大尉	
旗手	香月少尉	
大隊長	日下部少佐	△第一大隊
同副官	齋藤中尉	
大隊長	木澤少佐	△第二大隊
同副官	石丸中尉	
大隊長	八木少佐	△第三大隊
同副官	深澤中尉	
中隊長	帖佐大尉	△第一中隊
中隊長	大石大尉	△第二中隊
中隊長	九山大尉	△第三中隊
中隊長	貴島大尉	△第四中隊

△第五中隊　中隊長　綾部大尉
△第六中隊　中隊長　小宮山大尉
△第七中隊　中隊長　原田大尉
△第八中隊　中隊長　副島大尉
△第九中隊　中隊長　永谷大尉
△第十中隊　中隊長　堀大尉
△第十一中隊　中隊長　汾陽大尉
△第十二中隊　中隊長　大島大尉

而して八月の二十六日から運動を始められましたが此の時に第六師團の司令部は安村堡子と云ふ處に御座いました、そして十三聯隊の前哨が大費屯と云ふ處から約一里の處に在つたので御座います、で愈々運動開始と云ふ時分に司令部から命令が達しました

一、敵は依然安山站附近の高地を占領し、右翼は腰嶺堡

附近に在るものゝ如し、又四方臺附近より蘇馬臺（ヂヤチソー）高地附近并に候家屯附近の高地は敵の前進部隊に依りて占領せられ、甘泉堡、蛇鼠塞、耿家庄子に亘る線には敵の監視部隊在り

軍は明日甘泉堡、丁家橋の線に、第五軍は付馬營西方高地より上石橋子に亘る線に向ひ前進す。又軍司令部は明日午前五時、前樓子を出發し石頭山に到る。第三師團は當師團の右翼に連繫して甘泉堡東部鐵道線路に亘る間を占領し。第四師團は當師團の左翼に連繫して、丁家橋東方部落に亘る一帶を占領する筈。砲兵第一旅團司令部及び第十五聯隊は當師團本隊の直後に在りて攻進し、後柳河子南端に到る筈。

二、師團は明日甘線堡西方部落西端より、楊相屯西端に亘る線に向つて前進せんとす

三、右翼隊は午前二時、何れも歩兵の戰鬪開始を俟つて大王屯、東西堡の部落を出發し、張胡臺後柳河子を經て前進し、當面の敵を驅逐して甘泉堡、西方部落の西端より、楊相屯東方部落の西端附近に亘る線を蔽蔽して占領すべし

四、左翼隊（騎兵第三中隊及び一小隊を除き工兵中隊を增加す）は午前二時歩兵の先頭を以て大王屯邨境を出發し、交界臺南部蛇裝塞を前進し、當面の敵を驅逐し、右翼隊の左翼に連繫し、楊相屯西北部端附近に亘る線を蔽蔽して占領すべし

五、歩兵第十三聯隊本部及び一個大隊は、師團本部出發の後、宿營地出發大費屯を經て午前六時迄に前柳河子南端に至り、同聯隊第二大隊と合し、軍の總豫備となるべし

六、本部諸隊は午前一時警急集合場に集會し同時出發命令の內容は大略右の如きものであつて、其の日は矢張り何事もなく此の順序で進まれました、此の時分軍の總豫備となつて右翼隊の進路を後柳河子に向ひ前進すべし

居たのは歩兵三十三聯隊の一個大隊と、十三聯隊の二個大隊と四十八聯隊の一個大隊とでありました、而して十三聯隊の他の一個大隊は師團の豫備となつて居たのである。

で廿七日の夜は湯岡子と云ふ處に露營し此の日も何事もなく、愈々廿八日の午前一時二十分に全地出發、だん〳〵前進されたが其の時は最うちよい〳〵來る報告に依つて見れば敵は遠くへ退いて居ない樣子、夫れで八時二十五分と云ふ頃安山店の南端に閉展された、最う此の時第三師團は安山店に着して居て、下の方には已に一個聯隊程の兵が頗る猛烈なる戰鬪を始めて居る樣な模樣である、夫れに此の十三聯隊の方では何事も無い、二

十八日の夜はリシユキと云ふ處に宿營して二十九日も事無く滯在して愈々三十日となりましたが、此の日此の十三聯隊は第一大隊丈が鹿兒島の聯隊に連繫して前營となつて居りました、即ち之れが飲田少將が首山堡に打つ突かる眞んの始まりである、夫れで一個師團の兵を二旅團としてお話しいたしますと右翼隊の方が右飲田少將、左小泉少將と斯う云ふ具合ひになつて居りました。

偖て十三聯隊の殘りの二個大隊はどうなつて居るかと云つて見ますと、之は師團の本隊となつて居たので御座います、併し師團の本隊が二個大隊では足りないから四十八聯隊も本隊の方に加はつて居りました、而して午前七時二十分、愈々出發をしたが、此の時十三聯隊は丁度四十八聯隊の後の方から尾いて行く樣な塩梅であつた。

此の日は眞に何も雨後の事であつたものだから、泥濘脛を沒す

ると云ふ有樣で、其困難と云ふものは實にお話しにならない、何うしても兵が思ふ樣に進まない、漸つとの事でダブチンと云ふ處迄着されたが、最う此の時分第三師團の進んで居られる方には砲聲銃聲が凄まじく聞えて居つた、併し此方は未だそんな運に行かない、十二時頃になつて始めて久留米の四十八聯隊の一部が出て行つて、少しく戰ひを始めたが之れは久留米聯隊の お話しの時お話しいたして置きましたからお預かりと致しまして、其の日約三時半と云ふ時に師團から命令が達しました、之は吉弘聯隊長への命令で

貴官は一個大隊を率いて小超家臺に前進し、飲田少將の指揮下に入るべし

斯樣に申して參りましたから吉弘中佐は非常な喜びで『實に何うも仕合せだ、師團の本隊で居れば容易に戰鬪も出來まいと思つて居たのに、此の命令に接した以上は先頭第一の鬪ひが出來

るぞ』と、勇み立ち、直に第三大隊を率いて其處を出發致されました。

扨て此處でお話しが餘事に渉る樣で御座いますが、此の吉弘大佐が師團の命令を喜ばれたと云ふ事からして一寸一口お話し致して置き度う御座います、此の吉弘中佐はまだ十代の時分から私は知己であつたが、矢張り熊本の藩士で、友岡と云ふ學者の家に產れた人であつた、併し次男株だつたものですから、養子に行かれて吉弘の家を繼がれたので、そこで吉弘中佐と云ふの御座います、同中佐は餘程武術家で、殊に柔術は最も得意とする處で、餘程鍛練をして居られる、丈は先づ低い方だが、横に轉んでも可い位に横の方には太つて居る、其處で柔術の方には跳へ向きで餘程の業利きで、力も充分あつたから、舊藩時代には他國へ出たりなんかして隨分術を鍛つた事がある、先づ武官としては立派なもので御座いますが不幸にして戰ひに線が遠い

日清戰爭の時も遂うく出て行かれず、三十三年の戰爭の時なども同じく戰爭には線が無かつた、始めは大阪師團の高級副官で、小川師團長から大變贔負になつて居て永らく勤めて居られたから武官の事務官見た樣であつた、恁麼武人を永い間役人的に使はれるなんて隨分間違つた事で、中には吉弘中佐は臆病だ臆病者だから軍に線が遠ひなどゝ惡口を言つた人もあると云ふ事を聞き及んで居りました、然るに恰もよし、丁度日露戰爭の始まる前々年頃熊本の師團即ち第六師團の十三聯隊長として、着任後は何れの信任も厚く、日露戰爭が轉任さるゝ事となり、始まると凡て家族を集めて後事を托し、出て行かれる時分にも『余は何時でも戰爭と云ふものには線が遠く、之れ迄隨分惡口も云はれた事があつたが、幸ひにも今度は聯隊長の重任を帶びて行くから、今度こそは余が死すべき時だと思ふ、對手が露西亞の事であれば日清戰爭などとは比較にならない、世界の强國

と誇つて居る露西亞を撃ち付けねばならぬから聯隊長位は皆死んで了う決心で居らなければならぬ、夫れ位の決心で居なければ今度の戰爭は勝たれない、其の上余は大分惡口を云はれた事もあるから今度と云ふ今度は立派に死ぬ決心だ、必ず戰死をしたからつて、後に殘る者が惡びれをしてはならぬ、戰死の報に接したら大杯を擧げて祝して呉れ』と勇み進んで出て行かれたものでおいます、其位の決心で居られたものですから大喜びをされたので御座います。

偖て三十日は晩になりますと云ふと、吉弘中佐は飲田少將の居られる處を訪ねて見られると生憎居られなかつたので會はれない、其處等邊りを捜して居られる中に飲田少將の方から使が來て吉弘中佐を呼びに來た、直樣其處へ行つて見られると、飲田少將は最う敵前を距る僅かの處へ來て居られた、……其處の部落の名は判らない……で飲田少將の許に行かれると『閣下、私

は只今旅團長の居られた所に行つて見ましたけれ共お留守で今迄捜して居たのですが一向に判らず困つて居ましたのにお使を下さいまして仕合せで御座います。

分敵彈が飛んで來る喃、時に今夜は愈々夜襲を決行するつもりだ』と口頭を以て命令を傳へられました、其處で愈々夜襲と云ふ事が定まつたので御座います。

偖てお話しが一寸後へ戻る樣では御座いますけれども、第一大隊の方からお話しを申し上げんと、何んだか此の夜襲に就ての順序がない樣でございますから、先づ此の第一大隊のお話しから致して、愈よ〳〵第十三聯隊本隊の戰況に移ることに致しませう。

第一大隊は前申し上げた通り八月三十日には最う早くから首山堡マエトウンに對して散開をされて居られたが、午後の三時頃には雨もショボ〳〵降つて來る、夫れに乘じて大分敵壘は近く

進んで居られました、敵は待ち設けたる事なればバチ〳〵大分撃ち出した、此の時大隊長の日下部少佐は丸山大尉と貴島大尉と第二中隊との二個中隊を第二線として居られました、然るに大尉が率かれて居られる二個中隊を第一線に出して第一中隊此の丸山大尉貴島大尉の二個中隊は少し前進をすると、敵が頗る猛烈に撃ち出したので更に散開を爲やうと云ふので、命を下す此の一刹那、散開の敵の撃ち出す小銃弾は雨霰一時にバラバラ飛んで來たので、西村曹長始め三十四名と云ふ下士卒がバラ〳〵と倒れて了つた『ヤー残念だッ、撃たれました』と云ふ聲が其處にも此處にも起る、實に悲惨の狀況で御座います西村曹長は此の時、明皎々たる日本刀を打ち振り〳〵『ナニ之れしきの事に何程の事かある、足一本位失くなつたとて大丈夫だ』と云ふて日本刀を杖にして、『余は死ぬ迄は決して退かぬ、必ず退くな俺に續けッ』と負傷を冒して進まれるので、倒れて

居た兵も働ける者は負傷を冒して夫れに續く、之れ偏に西村曹長の武勇に感じたと云ふもので御座います、其の中に貴島大尉も駆け付けて増援し『サア打て……』とバラ〳〵と撃ち出し、進んでは止り、停つては撃ち出し、其の敵の前を眞つ黒に進まれたものだから味方に大分の死傷者は出て來たけれ共、一つの川がある、其の川の端迄達した、處が敵は其の川の向ふの塘にあつて塘陰から撃ち出す、然るに川端に出た味方は隨分不利益な地位に居る譯となつた、最う其の中に日は暮れる、おまけに雨はいよ〳〵激しく降り出したので仕方が無いから、遂に其の川の中にバラ〳〵と飛び込んだ、此の時貴島大尉も丸山大尉も一緒になつて飛び込んだものです、併し幸ひな事に、水が浅くて漸つと水は脛を没する位、其處で川の中から又一と頻り敵に向つて二個中隊が銃口を揃えて猛烈に打出した、すると前面に居た敵は餘り多勢ではなかつたと見えて、味方の猛射に

對し餘り激烈な射擊を行はなくなつた、けれ共味方の兵が少しでも進まうとすると此處を先途と擊ち出す、そこで進みも出來ねば退きも出來ぬ、いはゞ味方の二個中隊は川の中に擊ち竦められて居る樣な塩梅となつて了つた、怎麼な有樣であるから糧食運搬等も勿論出來やう筈が無く、日は愈々暮れて行くに、進みも出來ず退きも出來ぬ、立往生の姿となつて居ると、だんだん空腹を感じて來た、其處で銘々携へて居る生米を噛り始めた、夫れで漸う〳〵饑を凌ぐと云ふ樣な有樣、併し感心な事には苦しいとか何とか云ふ者が一人も無い、一意專心此の前の敵を擊退しやうと計り考へて居る、斯くする中に夜はだん〳〵闌けて行きて、早や三十一日の午前三時と云ふになりました、日暮頃から翌る日の午前三時迄川の中に立往生と云ふから堪らない、之れが戰爭でない平時であつたら、什麼金儲けだと云つて怎麼に永い時間川の中に這入つて居られるものでない戰爭と云ふは

實に甚いもので御座います、怎うして居ると日下部大隊長から大急ぎの使が來た、其の使は丸山、貴島の二人の中隊長に大隊本部迄來いと云ふのであつた、其處で敵の知らない樣に川から二人の中隊長はソッと陸に上つて、傳令と共に大急ぎで大隊本部に馳せ付けられたが何うしたのか大隊長の姿が見えぬ「ハテ今迄此處に居られたが」と傳令と共に尋ね廻つて居られると、大隊は今吉弘聯隊長からの急使が來て、其の方に行つて居られるから、最うおい〳〵歸られるだらうと云ふので暫く待つて居られると暫くして歸つて來られた『ヤー御苦勞々々、どうも川の中の立往生は困つたらう、併し幸ひの事に餘り死傷者は多くない樣だが何うだ、死傷さへ無ければ先づ目出度い方だ、今呼びに遣つたのは外でも無いが、今晩いよ〳〵夜襲と云ふ事に決まつたから、貴官等は之れから、川の中を引き揚げて窃かに兵を纏めなくてはならぬのだ、今晩夜襲のことに就いて一と通り

貴官等に口頭命令をせねばならぬ」と、口頭命令を傳へられました、

今や我大隊は重任を負ひて、マエトウンの敵に向つて夜襲を決行せんとす、其の隊もすみやかに此の處に集合せよ

斯樣な命令で御座いました、そして注意として必ず敵から射擊をしても味方から之れに應射してはならぬ、煙草も燻らす事は出來ぬ、劔の音にも特に注意をせんければならぬと申されました、そこで貴島、丸山の兩中隊長は『承知しました』と、大急きで以前の川のところへ歸つて來られて、直に兵を纏めて大隊長の云はれた集合地を指してやつて來られました、此の時の兵を纏められた事の實に速やかであつた事には聯隊長始め、大隊長も非常に感心をされた位ゐでございました、午前四時二十分を合圖に突き込まれた、之れから愈々夜襲の大劇戰で御座いま

す。

第十四

此の夜襲のお話しの前に一寸お話しを申して置かねばならぬので御座いますが第一大隊長日下部少佐は餘程嚴格な性の仁で、命令等を保守する事は評判である樣な云ふ樣な位で、隨分規律家で、率いて居られる部下も勢ひ左樣なつて了つて居た樣な梅鹽である、けれ共此の人は其の割合ひには、平常酒落な事も云はれる事があつた、夜襲の四五日前の事で御座いました、或る四五人の人を集めて宴會を開かれました、勿論戰地の事であれば宴席と云ふ宴席で無い、云はゞ素酒を飲み會つた迄の事である此の時分、少佐は丸裸体になつて、自から唄うて裸体踊りを始められた、左樣して云はれるには『吾輩が此の裸体踊りも何れ

今度が一生の踊り了いたらうと思ふから皆賞めて呉れ！』と云ふて非常に愉快に宴を終られた相で御座います、恁麼な具合ひであつたから同少佐も遠うに戰死と決心して居られたものと想はれます。丁度夜襲の少し前吉弘中佐が夜襲の命を授けられる時に『君は此間得意の裸体踊りを演られた相だな』と云はれると、全少佐は苦笑ひをして『ハー一生の踊り了いだと思つて非常に踊りました』と出て行かれる時、已に最う再びと此の世で聯隊長にお眼に懸りは出來ますまい、と云ふ樣な顏付が見えたので、吉弘中佐は『オイ日下部君、始終君と話をして居た通りに、最う悲觀的な事は云はぬ事にしやうぢや無いか、何うかシッカリ行つて呉れ、成功を祈るぞ』と云ふて簡單なる袂別の辭を交へられました、此の時吉弘聯隊長も『當底今晩の夜襲は成功覺束ない、と日下部大隊長も、生きて再たび還る事は出來ません』と考へられて居られたものですから、双方無量の感に打たれて別れられました、之れぞ即ち生別死別の境にて、想ひやるだに哀れな事で御座います。偖て夜は深々と更け渡り丁度時計の針が四時の處を指しますと、日下部少佐の率ゆる一個大隊を先頭に、後ろには吉弘中佐が進まれる、此の時の順序は第一大隊が第一線で、第三大隊は吉弘中佐の許に來て居りましたので直に第三大隊も或方面へ進擊の命を傳へられました、然るに此の第三大隊が愈々他の方面へ前進するとなると、吉弘中佐の傍に居るのは僅か一少隊でありまして、豫備として第十一中隊と外に一小隊が來る筈であつたのだけれ共、之れも他の方面に散開して居たものですから、第一線に居られる吉弘中佐は他の一小隊を持つて居られた丈けである、聯隊長が僅か一小隊位の兵を握つて、而も第二線に居られると云ふは實に危險千萬なお話しである、殊に此の第一線と第二線との間隔は僅か五十米突位なものであつた、併し仕方は無いから此のまゝだん〳〵前進を始められた

向ふ處はマエトウン、いさゝか雨は欲んだれと、空は一面掻き曇り、黑白も分かぬ烏羽玉の、闇夜を進む夜襲の兵、枚を含んで肅々と、敵壘指して進めども、天地寂として聲なく、時々敵壘より振り照らす探照燈の火影を見るのみ、だん〳〵進み寄つて見ると一條の鐵道線路がある、其の鐵道線路を越え樣とするが早いか敵は彼處に待ち受けて居つたと見えて、一時にバラバラ〳〵と撃ち出しました『ソラ敵だ』と云ふ一聲に、騷ぐな騷ぐなと制すれ共其處にも此處にも聲を上げた、別に聲を上げたと云つて大きな聲を立てたと云ふ譯ぢや無い『殘念』とか『討られた』とか敵彈に中つた者が叫んだまでゝ御座います、而して更け渡る夜中の事でもあり今迄鳴を靜めて居つたものであるから、忽ち其聲が敵方にも聞えたので、敵は益々無二無三にと睨を定めて撃ち出す、元より暗夜の事であるから何ぼ睨を定めて打つた所が睨の定まらう筈は無いのですけれ共、平常距離を

量つて居て撃つのだから、誠によく敵の彈が味方に中る、夫れに敵方から撃ち出すのは小銃彈計りなら兎も角も、機關砲を二門計り据へて居て撃ち出すから堪らない、味方の兵は其處にも此處にもバタ〳〵斃れる、此の時第一大隊長日下部少佐は先頭に樹つて『前へ〳〵、突き込め〳〵』と頻りに進んで居られましたが、丁度其の前に松の並木があつて、鈴木中尉も松村中尉も其方面指して進んで居られたが、松村中尉が直に負傷、バタリと倒れて居られると、丁度其處へ從卒の三崎喜造と云ふのが飛んで來て『ヤー小隊長お怪我で御座いますか、繃帶をいたしませう』と繃帶を取出さうとすると『馬鹿ッ、繃帶所の騷ぢやない、進め〳〵』と叫ばれたので、三崎從卒は松村中尉を佐けて、それなりに敵に向つて突き込まんといさゝか進むと、又も飛び來る一彈に、松村中尉と從卒は、二人一緒に撃ち斃され、『ヤー殘念』を此の世の名殘り、二人諸共名譽の戰死を遂げら

れました、云はゞ主從諸共の死戰で御座います、早や此の中に鈴木中尉も又々打倒され副間曹長、清水曹長亦斃れ、其の他下士卒バタリ〳〵と將棄倒しに打倒れる態に、日下部少佐は氣を焦ち、勇を振つて進み擊ち、身に數彈を蒙りしかと、固より決死の大隊長、一捲まず屈せず進みしが又々胸部腹部に敵の玉、急所を打ち貫かれたる大隊長は遂に倒れて起つ能はずして、倒れしまゝ暫しが間は『前へ〳〵』の號令を懸けて居られたが、次第に弱る虫の聲、人事不省に陷りたれば、ついに號令も聞えなくなりました、其處で各將校は猶更ら氣を勵まし、右へ左へと奮戰突擊、是非マエトウンを占領せんければならぬと、心は彌猛に逸れ共、身は鐵石に非ざれば、其處にも負傷此處にも戰死、云はゞ味方は滅茶々々となりました、そこで大隊長が何うなつたやら、誰が何うなつたやら一寸先も見えない暗夜の事である、此の時貴島中尉はフット自分の前に日下部少佐

が斃れて居られるに氣が附いて、非常に憤慨し、抜刀のまゝ、『ヨー大隊長は鐵道線路に斃れて居られるぞ、誰かある早く來て收容せよ』と云ふより早く飛んで來たのは、貴島中隊の上等兵森田長次、一等卒の尾宜蒲多、仝じく一等卒の藤原熊平、此の三人が一同に貴島中尉の聲を頼りに大隊長の斃れて居られる處に馳けて來たが、已に此の時敵兵の一二の者が遣つて來まして、日下部少佐の死体に手を附けんとする處であつたから、此の三人が素早く忍び寄つて敵兵二人を突き殺して、大隊長を引つ抱えたる夫れなりに、味方の方へと引き返す、跡を追ふて來る敵を或は支へ、或は進み、難なく味方の兵の群がる所へ、日下部少佐の死体を抱へて歸つて來た、之れ實に抜群の動功と云はなければなりませぬ此の尾宜蒲多と云ふ一等卒は沖繩縣人で御座います、夫れで姓名も日本には一寸少ないヤギカマトと敬ませて御座います、此の尾宜一等卒が始め出征の途中、敵地

に船より上陸して、遼陽方面に進む途中、とう云ふものか一向妻が見えなくなつた、そこで下士の人やら小隊長等は頻りに心配をして捜して見るけれ共何うしても分らない、そこで中隊長に此事を持ち出さねばならぬ、中隊長は又大隊長、大隊長は又聯隊長へと持ち出す事となり、遂う〳〵聯隊長に迄尾宜の事が聞える樣になつた、固より一人の兵卒位が無くなつたとて何も心配するには及ばぬ樣なものだけれ共、生死の程の判らぬものには何處々々迄も上に立つ人は世話をせねばならぬと云ふ事は當然の事であるから、聯隊長始め非常の心配で居られました、だん〳〵進んで行く中に、彼れは沖繩縣人だから臆病者の結果逃げ出したんだらう』『イヤ何ぼ沖繩縣人だからと云つて、多分病氣に罹つて斃れたのぢや御座いますまいか』『イヤ臆病に相違なし、或は露助に生捕られて、我軍の行動一切を喋舌つて居やしないだらうか』等と、餘計な心配をする人が澤山で御座いま

した、處が或所に於て二三日敵と對陣して居る所にヒョッと一等卒の尾宜が歸つて來ました『ヤ！尾宜の奴が歸つて來たぞ』『夫れは狐か何かぢやないか、尻の方に尾が下つちや居ないか疲れて居たのに幸ひだ、早く打殺して煮て了へ、ナニ煮る物が無いて、夫れでは燒け〳〵、ナニ山羊の頭を何うせよと云ふのぢや無い、尾宜蒲多を燒けと云ふのだ、ナニ眞んまの尾宜と？ヤー此奴あ何うも落膽だね』久し振りに肉を食するかと樂しんで居たのに、彼の馬鹿野郎が歸つて來たとは慾いた、今迄何うして居たんだらう？』と大騷ぎとなりました、そこで始め聯隊長に聞えて居るから、今度出て來たからして中隊長や大隊長の手切りで、其のまゝ左樣して置く譯に行かないで、其の旨聯隊長に告ぐると聯隊長は尾宜蒲多を呼び出して諄々と諭された、『以來右樣の事をする事は出來ない、此の節迄は此の儘免して遣るから、戰爭の時しつかり働いて名譽を恢復せよ』と云ふ意

味で以て懇篤に説いて聞かされました、沖縄縣人であると云ふ處から斯樣に慈悲を懸けて格別の處置も無くして事が濟みましたが、何でも此の一等卒が何故に委を隠して居たかに就いては詳しくは存じませんけれ共、一等卒が歸つて來た時分『貴樣は何處を今迄まで付いて居たか』と上官が尋ねると『餘り疲れて寢て居ました』と平氣で答へたのには一同一時驚いて了つた相で御座います、併し前申し上げました通り沖縄縣人だと云ふ處で罪にも處せられず其のまゝ放つて置かれたものと思はれます、處が幾ら沖縄縣人でも聯隊長の慈悲深い訓諭には頗る感じたものと見えて前申し上げた樣に、夜襲の際は群に優れた功を奏し其の後とても度々の勳功に、戰ひ終つて金鵄勳章を頂かれ、今尚ほ生存して居られます、之れは又お話しが横道に這入りましたが右の如くにして夜襲は已に失敗に終らんとするから、一旦其處を引揚げなくちやーならない、其處で一先づ引き揚げる樣

にと飲田少將から命令が下りましたから、以前の或る無名村迄引き揚げ樣として居ると、敵は又一頻り激しく打出したので味方は非常に混雜を始める、聯隊長は大變な心配で急いで引き揚げ樣と氣を焦慮とも敵彈は雨霰と飛んで來て意の如くならない仕方が無いから、吉弘聯隊長はズーッと前に進まれた、此の時分聯隊副官が吉弘中佐の後ろに居て足を打貫かれ、續いて廣川富平と云ふ聯隊の書記をして居つた人も足を打貫かれた、何うも彈と云ふものは不思議なもので前に居た聯隊長には中らずに眞後ろに居た二名の人に中るなどゝは實に妙だ、斯くの如き有樣で聯隊本部も已に危險な場合に陥つた、而うすると其處へ野田大尉が頭から血を被つて飛んで來た、吉弘聯隊長は之れを見ると『オイ君、何うした、顔一面血だらけぢやないか、負傷は何處だ』と尋ねられると、野田大尉は平氣の平座で『ナニ敵の彈が延つて行つたものですから』と流れる血沙を拭かうともし

ないので、聯隊長も驚いて了つた、併し幸ひにして野田大尉の班は餘り大した班ではなかつた相で御座います、野田大尉は自分の班より隊聯長の居られる處にドン〳〵敵彈が飛んで來るので非常の氣遣いで『聯隊長殿此處に居られては頗る危險です』と無理に其の場を引き揚げられ、敵の彈が飛んで來ない附近の部落に身を避けて愈々此處を一旦引き揚げられました、之れ丁度其の夜の未明に近き頃でなりました、併し聯隊長は引き揚げたのが殘念で殘念で堪らない、是非とも最う一度隊伍を整頓して二度目の夜襲を決行し、何うあつてもマエトウンの敵壘を占領せんければならぬと云ふ事で、第三大隊長八木少佐が日下部大隊長に變つて前任務を遂行する事に命ぜられました、而して再びマエトウンの敵壘に向つて突き懸つて見られたけれ共、忽ち八木少佐が顏面を撃たれ倒れて動けない、其の中に夜は明けた、

如何んとも仕樣が無い其處で第一大隊は其の方面に向つて

停止し、第三大隊も亦後方へ退却して停止するの已を得ざる事に立到りました。

此の八木少佐の倒れられた時分看護卒の山田政吉と云ふ人が非常の働きを以て手當萬端を施したので兼目を索き、此大隊長から感狀を貰つたと云ふ事で御座います。

怎麼な有樣で夜襲には二人の大隊長が、一人は戰死、一人は負傷と云ふ樣な事で遂う〳〵不成功に終つたから、再び前申しました處に二個大隊は暫く停止して後命を俟つと云ふ事になりました、然るに敵方からは例の有名なる大砲を以て頗る烈猛に打ち出しましたので敵砲彈が頭の上に百雷の轟くが如く凄まじい音響を立てゝ爆發するけれ共、味方の方では如何んとも登術がありません、味方の前途は何うなるものかと將校始め下士兵卒に至る迄非常の心配で居られる、味方に少しの砲兵でも來て居ないものだから敵の砲兵陣地を打ち殿す事

が出來ない、夫れに乘じて敵の陣地からは益々猛烈に打ち出す味方の砲兵が早く來て呉るればいがと待てども〳〵一向に來ない、三十一日の十二時頃になつても相變らず日本の砲兵は一門も到着しない、彼れ是れする中に三十一日の最う午後四時近くなつて來た、其時又も一通の命令書は吉弘聯隊長の許へ達しました

旅團はマエトウンの方面に向つて攻撃せんとす、貴聯隊は歩兵第四十五聯隊の左翼に連繋して、九十九高地の西部に向つて前進すべし

命令と云ふは斯樣の意味のもので御座いました丁度此の時第二大隊本部の木澤少佐が第七、八の二個中隊を率いて吉弘聯隊長の許へ參られました、其處へ工兵の一部隊もやつて來て、だん〳〵夕刻に近づくものから、又々前進を始める。此の時第二大隊の第七、八中隊が第一線で、第三大隊が第二線となりだんだ

ん進んで行かれたが、途中僅かの小戰はあつたが大した戰ひは無い、其の中に愈々日本の砲兵隊が到着しました。實は此の砲兵は三十日の夕刻破壊子と云ふ所に來て居つたもので、其處から射撃を始めて居つたけれ共、敵の砲兵陣地を見出す事が出來なかつたのと、九十九高地を敵の砲兵陣地と思つて居たので、味方の砲撃は格別功を奏さなかつたので、反對に敵の砲撃は頗る有功であつたから前申し上げた樣に味方の歩兵は苦戰に陥つたもので御座います、去れ共此の三十一日には、敵の砲兵陣地が九十九高地に在らずして、遙か谷蔭に砲車を敷いて居ると云ふ事が判り、味方の砲兵が全部揃ふて打ち出したから堪らない瞬く暇に敵の砲兵は沈默をして了つた『今だ〳〵』と此の機に乘じて進まうとするけれ共、歩兵の方からは相變らず機關砲や小銃を以て猛射をして居る、併し今日と云ふ今日は是非とも取らねばならぬと云ふ意氣込みであつたから、味方の死傷者を踏

み越え〳〵進まれる、かゝる折柄高田喜四郎と云ふ中尉が頭部を打たれて美事の戦死、之れに續いて下士兵卒も散々亂して打倒れる、併し前夜の夜襲に比べるとまだ何でも無い事である、そこで愈々奮進して程なく敵壘に押し寄せたが、だん〳〵夜に入つた、暗さも暗し眞つ暗がり、前に立つて居る味方の兵が分らぬ位なのにも拘はず無二無三に突き進む、今や敵と味方の混戰となり、第七中隊の星村中尉、第八中隊の原田大尉、之れ等の人が眞つ先に立つて愈々マエトウンの敵壘に突き進んだが、此時已に敵壘には僅かしきや居ない「サア敵は居ないぞ、進め〳〵、前へ〳〵、萬歳々々」とワーッと、一二度マエトウンの堡壘に押し寄せた、丁度此の時歩兵第四十五聯隊も同時にやつて來たので、茲に於て愈々十三聯隊とも力を合せて、夜の一時と云ふに全く首山堡のマエトウンを占領致されました、其處にも此處にも「萬歳々々」と三十日以來約五十時間の苦戦苦鬪の

疲れも今は忘れ果て、何れも大悦びで御座いました。之れから又鹿兒島聯隊のお話しに移る事と致しませう、其の前に一寸、此の激戦に歩兵第十三聯隊の死傷者の數を申して置きますが、無名村落迄が卒二名の戦死と下士卒三十二名の負傷で、首山堡のマエトウンまでが戦死將校四名で、下士卒が六十六名、馬匹が二頭、負傷將校八名で、下士卒が六千三百二十二名で、馬匹が二頭。

夫れから申し落しましたが、三十一日の夜狭原と云ふ中尉も名譽の戦死をされて居りましたが、夫れは高田喜四郎君と、相前後しての戦死で御座いました、けれども此の人の戦死は都合あつて、たゞ戦死をされましたと云ふこと迄にして止めて置きます。

第十一回

鹿児島の太田聯隊のお話しに先き立ち一寸一口申し落した事がありましたから茲にお話しいたして置きます。歩兵第二十三聯隊の戦況は極めて粗略に致して置きましたが、彼の時四十八聯隊と同様に、二十三聯隊も滅茶々々に撃られて了つたものです江口聯隊長始め死傷者の総数一千百十六名を出した位の事であるから非常な激戦苦闘でありました、従つて調べが餘程出來難く、前申し上げた通り再調べの上後編でお話し致す事として置きます、それで特にお話しして置きたいのは、十三聯隊に於て抜群の功を顯はした古川三郎と云ふ中尉の人が居られました、此の人は首山堡迄に随分種々な働きも御座いましたが、首山堡夜襲の時分に最も先頭に猛進されたが、敵壘の間近に進むと其

處に敵の伏兵らしいのが居る、敵か味方か定かに夫と分らね共何でも敵兵らしいので近寄つて見て二言三言言葉を交して見ると全くの敵であるから矢庭に飛び込んで一刀の下に二人の兵を斬り殺されたと云ふ事で御座います。

丁度此の時分鹿児島の四十五聯隊は左の如き組織となつて居りました。

○歩兵第四十五聯隊

△第一大隊　聯隊長　太田大佐
　　同副官　志岐大尉
　　大隊長　田中少佐
　　同副官　林中尉（吉彦）

△第二大隊　大隊長　前田少佐
　　同副官　田尻中尉

△第三大隊　大隊長　提少佐

△第一中隊　中隊長　中尉　松本大尉
△第二中隊　中隊長　中尉　庄田大尉
△第三中隊　中隊長　中尉　山口大尉
△第四中隊　中隊長　中尉　鵜飼大尉
△第五中隊　中隊長　中尉　廣瀬大尉
△第六中隊　中隊長　中尉　古莊大尉
△第七中隊　中隊長　中尉　我有大尉
△第八中隊　中隊長　中尉　竹下大尉
△第九中隊　中隊長　中尉　坂本大尉
△第十中隊　中隊長　中尉　吉原大尉
△第十一中隊　中隊長　中尉　藤田大尉
△第十二中隊　中隊長　中尉　田邊大尉

同副官　林　中尉（明次郎）

でいよ〳〵八月の三十日の午前八時頃小趙家臺と云ふ所に到着し、九時頃九十九高地に向つて前進を始めました、此時第三大隊は旅團の豫備となつて居られ、第二大隊の前田少佐は五六七八の四個中隊を率いて居られました、だん〳〵進まれると敵は安家庄子と云ふ處に居て、我が兵が前進し來ると見るや忽ち射撃を始めた、併して此處に居た敵兵は餘り多數で無いと云ふ事がちやんと判つて居たものですから『ナニ高の知れた兵數だ、此の位の敵は放つとけ〳〵』と暫々進まれたが、何分頑固に撃ち出すものだから味方も多少癪に觸つたものと見えて『撃退々々』と云ふので忽ち其處へ散開し『サアー撃て……』と云ふのでバラ〳〵非常な勢ひで打出したから堪らない、敵は一堪りもなく逃げ出した、處が其の前面に一筋の河が御座いました、之は安家庄子より約三百米突計り隔つて居りましたが、我軍は河の源迄敵を驅逐して、開展のまゝ進んで居られると、

突然川向ふの高い處から敵が非常の勢ひを以て撃ち出した、夫れでも味方も『ヨシ來た』と計り直に之れに對して射撃を始め暫しが程は戦つて居りましたが、其の中に第一中隊の松本大尉の『ヤー了つた』と云はれた聲が聞えたから、從卒が駆け寄つて見ると頭部を射られて其處へ倒れて居られる、そこで從卒は『中隊長殿お怪我で御座いますか、何うしました』と宛然自分の主人の斃れた時の樣な心持であつたらしい、泣聲立てゝ引起して見ると哀れや已に絶命して居られた、泣く〳〵背負ふて退いたが、之れと同時に下士兵卒の死傷も大分出來ました、そこで斯うなると無闇に進まれない、相對して暫く闘かつて居られたが、時間も過ぎて早や正午過ぎと相成りました、其の中に十三隊聯隊との連絡も取れて、太田聯隊と吉弘聯隊と連繋する事が出來た、此の時敵に向つて居るのは第一大隊と第二大隊の二個大隊であるが、それとても第一大隊の方は僅か二個中隊しか來

て居らぬので、中隊は合して六個中隊、兵數は約千餘名、夫れに面積が廣いので、僅か千餘名の兵士では何う考へても不足であるから、聯隊長は早くも此の事にお氣が附かれたものと見えて、

第三中隊は貴官の指揮下に屬す

と云ふ命令を持つて第三中隊が大急ぎでやつて來たものだから田中大隊長は非常の喜びで『ヤー今度は二個中隊で戦爭をせねばならぬかと思つて居たのに、仕合せな事には一個中隊增えて來た』と第一中隊と第四中隊の間に置いて見られたが、夫れでも矢張り不足を告げて仕方がない、聯隊長は此樣子を見て猶ほ心配されたものと見え、遂に第二中隊も急いでやつて來て延進增加を致された、其處で聯隊長は何も持たない安家庄子と云ふ處に只一人來て居られると云ふ樣な有樣、斯くして午後の三時頃ほいとなりますと、段々彈藥が欠乏して來た、そこで彈藥

補充を爲ねばならぬ、戰ひ最中に彈藥の補充？頗る困難な事であるが仕方がない、夫れに敵は相變らず猛烈に打出す、併し大隊長は非常な勇氣を以て是非前面の小さい川迄行かうと云ふ考へがあるけれ共、何うして思ふ地點に進まれないけれども、幸ひな事には川の左右の堤防に丁度櫨の木の樣なものが點々あるから、之を木蔭に取つて少しづゝ進んで居られました、夫でもまだ川の端に行く事が出來ない、其中に第六師團長からの命令が達しました、其命令の大要は、

第四軍及び第三師團は攻擊を維持す、依つて聯隊も機を見て攻擊を轉ずべし

と云ふので御座いました、之れが丁度四時少し前の事であつたが、早や四時頃になると、第六師團の砲兵が到着して、安家庄子の南方に砲列を敷き、直にドン〳〵打出したものですから、

『ヤー愉快々々、砲兵が着したから大丈夫、今行つたら確然扳

ける、占領される』と云ふので歩兵は砲兵の援護に依つて前進しやうと思ふては居るが、師團長の命令ある事だし、時機を待つて居らねばならぬから『まだ〳〵』と云つて居られる中に早や午後七時となつた、此時分が彼我の砲兵は非常に激烈なる砲火を交へた時で御座います、然るにだん〳〵時計の針は進んで八時過ぎとも想ふ頃、敵味方の砲聲が何う云ふものか大分緩になつた、そこで第一大隊も此機を以てと云ふので前進を始めると續いて第二大隊も同時に前進をする、而して前面の川に這入つて向ふの堤防迄に多少の兵は乘り込んだが、此の時敵は何うしたものか其堤防から退却したもので堤防に進んだ我兵は相變らず射擊をして居ると、俄かに前面から雨か霰と打出した、此の時味方の兵は四五百名も達して居りましたが、眞つ暗がりの事であるから死傷者の程も確張分らない、なれども『ヤッ射られた』『殘念ッ』と其處にも此處にも

味方の兵の叫びが聞える、吉田中尉の戰死に續いて添田少尉が戰死、そこへ山口中尉も負傷する、高崎中尉、和田中尉、有馬少尉も負傷と云ふ樣な有樣だから、下士卒に死傷者の多い事は申す迄もない。

又一方旅團の豫備となつて居た第三大隊も聯隊長の許へ來て居つたらしく、此の時の戰ひに堤第三大隊長も他の隊を率いて來て居られたから味方は大分殖へて居りました、併し刻一刻と激戰になると、第三大隊長の堤少佐も負傷をされると云ふ樣な騷ぎになつて來た、すると何う云ふものであつたか九時過ぎとなると敵味方の砲聲がパッタリ止んだ、砲聲計りでない銃聲も盛つ張り聞えない、何だか申し合せた樣に味方の方からも一發も發せない、夫れで味方の歩兵も方では取敢えず其處に假の防禦工事を施さねばならぬ、何も工兵が工事を施すのでやない、歩兵が勝手に掘つて居る、彼れ是

れする中に早や十一時頃と相成つた、其の中に前面の方から、『敵の夜襲だ〳〵』と云ふ聞が聲えて來たから、四十五聯隊の十個中隊計りの兵が聲に應じて戰ひの準備をして居られたが敵は遂う〳〵來なかつた、之れは多分十三聯隊の方で夜襲を行つた騷ぎの間違ひであつたかと思はれます、扨て夜ばだん〳〵と更けて來る、大隊長は向ふの川端から一先づ兵を引き揚げ樣と云ふ心算で、餘程纏め樣とされるけれ共大部の兵がとうしても退かない、其處で各將校は、何で命令を用ゐぬだらう、何故命令に服せないだらう』と呟やいて居るものゝ大きな聲で號令を懸ける譯に行かない、何故かと云ふに夫れは敵に接近して居るから、其の聲を聞き附けて當突打ち出すかも知れないからだ、で一旦退いた將校連が再び向ふへ行つて小さい聲で『オイ〳〵何故命令を用ゐぬのか、退けよと云ふのに何う云ふ譯で退かないのか』と云つて見るけれ共一向に返事が無い、怪しからぬ奴

共だと將校連は憤ほり立てゝ『オイ〳〵』と引き起して見ると之れはしたり、動かないのも道理だ、皆前面に向つて伏せて居る味方の兵は總て戰死をして居るので御座います、始めて暗夜に於ける悲慘の狀況を悟られた大隊長や中隊長は小さい聲で、

『實に何うも慘憺たる狀態だなー、伏せて居るのは皆死んで居るのだ、何と哀れぢやないか、之れは何でも戰死者は放ふつて置くとしても負傷者丈けは是非收容せねばならぬと云ふので各〳〵負傷者を一人づゝ引つ擔いで、川の手前に引返し、下士兵卒にも命じて、負傷者は悉く收容し兎も角何うか斯うか兵を纏めた左斯斯樣する中に三十日の拂曉となりましたが、此時分に砲兵は陣地を安家庄子の左に變換した、之が度々申上げます樣に、敵の砲兵陣地が九十九高地の頂上でないと云ふのが始めて判つて、敵の砲兵陣地を攻撃するには都合が惡いと云ふので位置を換へたので御座います。

で愈々位置の變換をすると直に砲撃を始めた、此の時は第六師團の砲兵計りでなく、砲兵旅團も到着して、總ての砲を合して百八十門御座いました、之れが一時に打ち出したので、凄まじいの凄ましくないのつて無い、首山堡も爲めに覆へりはせんかと思ふ計りである、何んでも味方の砲彈が非常に程よく敵の砲兵陣地に命中したものだから忽ちの間に沈默して了つた、午前の六時頃から七時頃になると最う敵の方でも大いに弱つたらしい、遙かに見て居ると味方の砲彈が敵の砲兵陣地を始め、マエトウンの堡壘にボス〳〵的中するのが實に面白い位である『ヤー是れで之れ迄の仇討が出來る、愉快々〳〵』と聲を發して『萬歲々々』と叫んで居たが、午後の七時となると前線の歩兵は已に前進を始めた、此の時一、二の二個大隊は敵の前の鐵道線路を占領した、而して八時頃からはマエトウンの方に又〳〵前進を始められました、處が其の方には幾重にも鐵條網が引つ張つて

あるが、踏み越え〳〵味方は敵を駆逐して、だん〳〵進んで居る、すると聯隊長の方から急使が來て妄りに進んでは不可ない其の附近に敵の地雷火が敷いてあると云ふ事を申して來ました夫れ計りでなく後に引つ返せと云ふ事であつた、併し一方兵を派してだん〳〵捜して見ると、鐵道線路の横にある小屋の附近に一つの地雷火が敷いてあつたが、夫れは最う我軍の砲彈の爲めに破裂して何んの功力も無い樣になつて居たから、愈々前進を繼續して居られたが此の時分マエトウンに居つた敵は已に退却して了つて居た、そこで十三聯隊と協力して同時に此のマエトウンを占領されたるは十三聯隊の戰況をお話し致しましたのと何も異つた事はありませぬから、先づ此の位にして止めて置きます。

又お話しは前に戻ります樣ですが歩兵第二十三聯隊と四十八聯隊、此の二個聯隊に死傷者の多かつた譯を御參考迄にお話し致し

して置きますが、此の第六師團の全員が敵地に上陸して以來、首山堡の戰ひに望む迄は途中度々小さな衝突はあつたけれども戰爭と云つても眞んの小さな戰爭計りだつたものだから、一向味方に苦痛と云ふ事がない、將校下士卒凡ての人が戰爭と云ふものは恁麼に易いものであるだらうか、全で之れは機動演習と仝じだ、恁麼に優しいものだらうかと考へて居られた、夫れで首山堡の戰ひも之れ位のものであらうと想つて居られたが、第一の失敗らしい、尤も夫れ計りの原因では無い、度々首山堡の方に出された斥候が少しも完全な情報を齎らして來なかつた、遼陽の方には餘程堅固の防禦を施して、大多數の敵が居ると云ふ事を聞いて居られたので、首山堡の方には敵が然う澤山居やうとは思つて居られなかつたらしい、恁麼處に敵がまど〳〵しては居られぬ、つまり大戰爭は遼陽だ〳〵と段々押して行つて、右の二個聯隊が敵前僅かに二百か三百米突の處に押し寄せてか

ら始めて、敵が意外の多數であると云ふ事が判つたと云ふのも一つの原因で、殊に我軍の差遣に當る小部落には敵の機關砲隊が居て、我軍が十分進んだ處で一齊に打ち出し所謂側面攻撃を行つた結果、恰も串差しにやられたもので、一發の敵彈に三人も四人も斃された相で御座います。

夫れから此の時分迄、我第六師團の將校下士卒は機關砲が何樣ものであるか見た人が無かつた、其の音も知らなかつたものだからガタ〳〵〳〵打ち出して、高粱が倒れる拍子が丁度敵の喊聲と聞えたものだから、敵の逆襲だと思はれた事もある位で、機關砲を知らなかつた爲めに意外の失敗を來たされたと云ふ事も事實の樣で御座います、夫れで之等は此の時戰鬪に參與せられた方に就いて聞かれると私の話しとよく合ふ處があらうと考へます。

此外だん〳〵お話し漏れもありますけれど今からお話しすると

何だか都合が惡ふ御座いますから、別に項を追ふてお談する事に致しませう。

新講談 春曲へ

日露戦争談（第八編）終

明治四十三年二月廿日印刷
明治四十三年二月廿五日發行

著作權所有

日露戰爭談第八編

定價金四拾錢

著作者　美當一調
發行者　大阪市南區順慶町通四丁目百七十九番邸　此村庄助
印刷者　大阪市南區鹽町通二丁目四十一番屋敷　吉村源次郎
印刷所　大阪市南區安堂寺橋通二丁目二十六番邸　山田元吉

發行書肆　大阪市南區心齋橋通順慶町北へ入　此村欽英堂
電話東二千六百八十六番
大阪振替口座千〇三十六番

260
7
311